

フィリピン人「慰安婦」訴訟一審判決別紙
被害事実等目録

(東京地裁1998年10月9日判決より)

[→戦争・植民地被害者の被害事実—戦後補償裁判の記録から](#)

[→HOME](#)

被害事実等目録

第一 原告らの主張する被害事実

一 戦争中、日本軍は、フィリピン人に対し、略奪、殺害、強姦等を行った。フィリピンを占領していた日本軍の第一四方面軍は、一九四五年一月、「米軍迎撃の際は、軍背後及び周辺を無人化すべし」との指令を各部隊に発した。同月二五日、ルソン島マニラ南方のラグナ州、バタングス州、ケソン州を占領していた歩兵第一七連隊は、「住民にしてゲリラに協力するものはゲリラとみなし肅正せよ」と命令し、いわゆる「戦場の無人化」作戦を実行した。この作戦において、ゲリラと一般住民の区別がつかないとの理由で、女性や子供を含む多くの住民がゲリラと見なされ、家ごと焼かれたり、銃剣で刺されたり、崖や井

戸に突き落とされるなどの残虐な方法で虐殺された。

二 原告らは、右日本軍構成員らに、銃剣によって暴力的に拉致され、日本軍の駐屯地等に監禁され、不特定多数の者から強姦を反復された。ほとんどの原告は暴力をふるわれ、生涯消えない傷跡を身体に受けている。また、監禁期間も、一か月から数か月、時には一、二年以上の長期間に及んだ。連行に対する抵抗の際、近親者が目前で虐殺されたケースも多い。身体に受けた暴行や強姦によって、子宮摘出手術、不妊症等、治療を必要とするに至った者もいる。被害にあった当時、原告らの年齢は、原告四六人中、一〇代三三人（うち一五歳以下一五人）、二〇代二人、三〇代一人であり、二〇歳未満が圧倒的に多い。原告らのうち、ゲリラに身を投じていたものはきわめて僅かで、大部分の原告は、日常的な生活の中で突然日本軍に捕えられ、被害を受けている。

三 原告らは、日本軍による長期にわたる監禁、性的虐待によって深刻な精神的打撃を受けた。原告らの多くは、解放後しばらく、激しい鬱状態に陥ったり、汚されてしまった自分には未来はないと絶望的になったりした。

そして、原告ら被害者の苦しみは、時の流れによっても癒されることがなく、今もなおその後遺症、すなわち心的外傷後ストレス障害に苦しんでいる。まず、結婚に対する拒否反応が生じたり、結婚した場合でも夫との夫婦生活がうまくいかず、家庭内不和等の問題が生じている原告が多い。このように夫婦関係がうまくいかないことで、原告らはさらに孤立感を深めることになるが、それは心的外傷による影響をますます長期化させることになる。また、戦後五〇年以上を経た現在でも、当時の記憶が生々しく蘇る、いわゆるフラッシュバックの症状に悩まされている原告もいる。さらに、被害体験を語ることが非常に困難



であり、未だに家族にも話せず、または話しても理解されないという原告も少なくない。本件のような性暴力による被害の場合、被害者であるということが社会的ステイグマとなってしまうのが現実であり、被害者はそれを恐れて被害の事実を秘匿しようとする。その点が戦争捕虜の場合と大きく異なる点であり、性被害による心的外傷の治癒を困難にする大きな原因となっている。原告らは、戦後五〇年間、この苦しみを誰にも語らず、一人苦しみ続けてきたのである。

第二 原告らの主張する各原告らの具体的被害事実

一 原告
[Redacted Name] ヘンソン

原告
[Redacted Name] ヘンソン（以下「原告ヘンソン」という。）は、

一九二七年二月五日、ルソン島の現在のマニラ首都圏パサイ市（当時はリサール州パサイ）で生まれた。

一九四二年二月、原告ヘンソンがマツキンレー要塞（現在のフォート・ポニ
ファシオ）の近くで薪を集めて歩いていたら、二人の日本兵が同原告を捕
まえ、別の日本人将校とその二人の日本兵が次々に同原告を強姦した。原告ヘ
ンソンは、強姦による出血のため歩くこともできない状態となったが、運良く
通りかかった近くの農民に助けられ、その家で二日間休養した後帰宅した。

約二週間の休養の後、体調の回復した原告ヘンソンは、隣人や親類達と薪集
めに参加したが、そこにはサーベルを持った将校と思われる日本兵が待ち伏せ
ており、その日本兵は原告ヘンソンを見ると直ぐに同原告を捕まえて強姦した。

それから約一年後の一九四三年四月のある日、原告ヘンソンは、他の二人と
共に、水牛の荷車をひいてアンヘレス市ヘンソンストリートにある病院前の日
本兵の検問所を通過しようとしたところ、日本兵は、原告ヘンソンだけを呼び

止めて日本軍が駐屯地にしていた病院へ連れて行き、そこに同原告を監禁した。そこには他に六人の女性がいた。

原告ヘンソンらは、その駐屯地で兵士らのセックスの相手をさせられた。午後二時から夜一〇時まで、大勢の日本兵がトラックに乗ってやって来て、原告ヘンソンらを強姦した。原告ヘンソンは一日二〇人から多いときは三〇人の相手をさせられた。当時、原告ヘンソンには初潮がなく、生理で休んでいる他の女性の分も負担させられたためと思われた。原告ヘンソンは、三か月間息つく暇もなく、日本軍の性奴隷として、彼らの性の慰みにされた。

三か月後、原告ヘンソンら女性全員は近くの別の建物へ移動させられ、そこでもまた毎日、日本兵の相手をさせられた。日本人将校の宿泊所や家に連れて行かれたこともあった。そこには将校がおり、約一時間の間、二回にわたって

相手をさせられた。拒めば必ず殺されることが分かっていたので、拒否することとはできなかつた。

原告ヘンソンらにはいつも見張りが付けられ、駐屯地の中は歩けたが、外には出られなかつた。一九四三年一二月、クリスマス頃の頃、原告ヘンソンはマリアにかかつて高熱が続き、薬を飲んで休養したが、大量の出血をし流産も経験した。一九四四年一月のある日、原告ヘンソンは銃剣等でひどく殴られた。

原告ヘンソンが日本兵の村を焼き払う話を聞いて村の住民に伝えたことが気づかれたためであつた。原告ヘンソンは床に倒れ、顔はあざだらけになつた。そして、手を縛られて他の囚人と一緒にさせられた。拷問による外傷に加え、マリアの症状も悪化した。

その後、フクバラハップ（抗日ゲリラ）が原告ヘンソンのいた場所を襲つて

同原告を救い出した。原告ヘンソンは拷問とマラリアのため非常に高熱に苦しみ、二か月間意識を失ったままだった。その後、一九四五年一月二七日、米軍がアンヘレス市にやってきて、戦争は事実上終結した。

解放後しばらくの間、原告ヘンソンは、日本軍による被害をいつも思い出し、なぜ捕まったか、なぜもっと早く逃げられなかったかなど自分自身を責める思いに悩まされた。その後も、原告ヘンソンは日本軍に捕らえられていた時のことを思い出すと苦しくなり、時に夢を見ると、数日間ぼんやりとしてしまい、独り言を言い、体調を崩した。


原告ヘンソンは、戦争中のマラリアや拷問の後遺症で、口や顎が変形して会話が困難であり、よだれが始終出て、耳も良く聞こえないなどの障害を有していた。最近では高血圧や心臓の病気にも苦しんでいた。

二 原告 ■■■■■ コルテス

原告 ■■■■■ コルテス（以下「原告コルテス」という。）は、一九二

三年八月一五日、ルソン島北部のパンパンガ州サンタ・リタで生まれた。

原告コルテスは、一九四一年四月一日、最初の夫とマニラ市役所に婚姻届を出した。夫は結婚後、徴兵されてフィリピン陸軍の軍人となりバターンに派遣され、日本軍との戦闘で捕虜になったが、一九四三年三、四月頃、脱走して原告コルテスの住む家に戻った。しかし、家に戻った翌日の午前二時頃、日本軍がやってきて夫を逮捕し、原告コルテスと夫を、かつてスペイン軍の司令部があったイントラムロスの建物に連行した。そして、さらにサンチャゴ要塞の中の建物に連れて行き、原告コルテスの目の前で夫を拷問した。日本兵は、夫を裸で逆さづりにし、棒で殴るなどし、その後、夫を椅子に座らせ、手の指と指



の間にスチールをはめ込み、それをぐっと押さえて、指の骨を折ったり、指の爪一枚一枚を剥がしたりした。最後に、かみそりで頭の髪の毛だけではなく皮まで剃り、血がぼとぼと夫の顔に流れ落ちた。日本兵はこれらすべてを原告コルテスの目の前で行った。これは夫に対してのみならず、原告コルテスにとっても拷問であり、同原告は失神してしまった。その後、夫は別の独房に入れられ、他の捕虜と一緒に殺されたと聞かされた。

原告コルテスに対する性的虐待は、それから一週間後に始まった。原告コルテスは、日本兵によって二階の部屋へ連れて行かれ、そこで部隊長であるという日本人将校に強姦された。強姦が終わった後、原告コルテスは、一旦独房に返されたが、二、三時間後、今度は別の兵士に小さな部屋に連れて行かれ、そこで強姦された。

その日以後、兵士らは原告コルテスの独房にきて、その小さな部屋に連れ出すようになり、順番に同原告を強姦した。二人の兵士が原告コルテスの腕をおさえ、他の兵士が強姦し、また他の兵士が見て待っていた。サンチャゴ要塞での約六か月の監禁中五か月にわたり、兵士達は威嚇と暴力を用いて原告コルテスを彼らの「慰め」と性的要求を満たす道具にした。週に三回、一度に三人が多い時は七人位の兵士が原告コルテスを強姦した。

サンチャゴ要塞から釈放後、原告コルテスは、義母の家に身を寄せたが、当時妊娠三か月の状態だった。日本兵の強姦による妊娠であり、父親はだれか分からなかった。この子は結局流産したが、原告コルテスは恥ずかしさの余り義母の家を出て、プルーメントリットに移り、そこの食堂で働いた。ある時食堂に日本兵が数人やってきたが、その中にサンチャゴ要塞の時の兵士が一人混じ

つていた。その日本兵は原告コルテスを覚えており、逃げる同原告を追いかけ、墓地の中で強姦した。

夫への拷問や兵士達への性的屈従、これらの監禁中の体験は今でも原告コルテスを時折苦しめる。特にテレビや映画で暴行シーンを見た時、それが如実に蘇ってくる。

三 原告 [] サリノグ

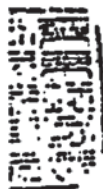
原告 [] サリノグ（以下「原告サリノグ」という。）は、一九二八年二月八日、アンティケ州パンダン町の中心地ポブラシオンで生まれた。

一九四一年一二月頃、二人の日本兵が原告サリノグらの家に押し入ってきた。日本兵は原告サリノグを連行しようとし、父は必死にそれに抵抗した。すると、外にいた二人の日本兵も入って来て、そのうちの一人が軍刀を抜いて父に斬り

つけた。原告サリノグは倒れた父を駆け寄って抱き起こそうとしたが、日本兵に蹴られた。その時、原告サリノグは父の首が身体を離れ、部屋の隅の柱の根元あたりに飛んでいるのに気が付いた。

原告サリノグは、現在のフィリピン警察軍の本部がある建物から数十メートル前後の距離にあった建物に連行され、この建物の一室に閉じ込められた。

連行された翌日の未明、原告サリノグをこの部屋に連れて来た日本兵二人が再びやってきた。一人はヒロオカ大尉だった。大尉は、原告サリノグのそばに座って、同原告の体を求めてきたが、同原告は断固拒否した。すると、大尉は原告サリノグの胸等を触ってきたので、同原告は手を押し退けようと抵抗した。しかし、大尉の方が力が強く、結局原告サリノグは阻止できず、強姦されてしまった。



その後、原告サリノグが床の上に倒れていると、もう一人の日本兵がのしかかって強姦しようとしてきた。原告サリノグは再度抵抗したが、頭を固い物で殴られ気を失ってしまった。原告サリノグが意識を取り戻した時には、衣服がはぎ取られ、頭等から出血しており、日本兵が同原告の頭や身体の出血を湯で拭いていた。この時の頭の傷は今でも残っている。

その直後の三日間を除き、以後、原告サリノグはここで事実上囚人として、日本兵に代わる代わる強姦されることになった。時には午後から深夜に至るまで強姦されたこともあった。閉じ込められて数か月後、原告サリノグは部屋を出て時々家の中を歩くことを許されたが、建物の外に出ることは許されなかった。

ある日、原告サリノグは、兵士がテーブルの上に忘れた鍵を使ってドアを開

け、建物から逃げ出した。しかし、三日目には原告サリノグはまた別の日本兵に捕まってしまった。原告サリノグは日本兵のオクムラ大佐の家に連れて行かれ、奴隷のように扱われた。掃除、洗濯、アイロン掛け、食事の準備等をさせられた。さらにオクムラ大佐やよく三人でやってくるその友人達に強姦された。

一九四五年のある日、米軍の来襲により日本軍は撤退し、オクムラ大佐もいなくなり、原告サリノグは奴隷生活から解放された。

原告サリノグは結婚を考えたことは一度もない。あの「大きな家」に監禁された時に起きたことを思い出すと、いつも本当に情け無くなり、傷つき、自分が衰れになる。原告サリノグは自殺を試みたことすらある。あのおぞましい体験のため、再び傷つけられるのではないかと怖くて、原告サリノグは結婚することができなかつた。またいつも、目の前で殺され、遺体の行方さえわからな

い、たった一人の肉親であることを考えている。

四 原告

サラス

原告

サラス（以下「原告サラス」という。）

は、一九二六年三月二〇日にパナイ島のカピス州ロハス市タンバック、サモラ通りで生まれた。


一九四二年の後半頃のある日、三人の日本兵と一人の民間人のフィリピン人が原告サラス達の家にやってきた。原告サラスはこの三人の日本兵に、腕や腰を掴まれ、約一キロメートル離れたエマニユエル病院に歩いて連行された。その道中、日本兵は原告サラスの下腹部をさわったりキスをしたり、同原告の体のあちこちを触った。その間たくさんさんのフィリピン人と行き会い、原告サラスは大声で泣き叫んだが、みんな日本兵を恐れて、何もしてくれなかった。当時

エマニユエル病院は日本軍の駐屯地にされていた。

原告サラスは、病院の敷地内にある建物の一階の一室に連れ込まれた。原告サラスを連行した三人の日本兵は同原告の服を引き裂いてベッドに寝かせ、一人が同原告の両手を押さえ、一人が両足を押さえ、代わる代わる強姦した。原告サラスはずっと泣いていた。当時原告サラスは初潮も迎えていなかった。

原告サラスはその時からずっとこの部屋に閉じ込められた。ドアは施錠されていた。三人の日本兵は毎日やってきて原告サラスを繰り返し強姦した。来る時間帯はまちまちで、朝もあれば夜もあった。原告サラスを強姦したのはこの三人だけで、他の日本兵が来ることはなかった。

その後しばらくして、この日本軍の駐屯地が空爆を受けた。これが米軍の飛行機かどうかは原告サラスには分からなかった。原告サラスは、閉じ込められ



た部屋にいたときに爆撃を受け、衝撃でうつ伏せに倒れ、背中を負傷し気を失った。原告サラスは病院の建物のロハス通りをはさんだ向いの家に移されて治療を受けた。原告サラスはそこで三か月程治療を受けたが、その間も同原告はその向いの建物で三人の日本兵から強姦され続けた。

日本軍から逃れた後、原告サラスの病状が悪くなり、同原告をみてくれた医者には、もう少しで死ぬところだった、卵巣がひどくはれていると言い、同原告に手術をした。原告サラスの卵巣はこの時両方とも摘出されてしまった。

戦後、原告サラスは一旦小学校に復学したが、日本兵の慰みものになったなどとはやしたてられたりしたこともあり、すぐにやめてしまった。ロハスでは原告サラスの戦争中の体験を知っている人が多く、噂をされたりして同原告は辛い思いをした。

原告サラスは、一九七三年に結婚したが、一九九二年になつて、はじめて戦争中のつらい体験を夫に打ち明け、手術をして子供ができなくなったことも話した。それを聞いた夫はかなり衝撃を受け、何故結婚前に言ってくれなかつたのかと原告サラスを責めた。しばしば夫婦の間で口論があり、原告サラスは家出してロハスにいる妹の家に身を寄せたこともある。

五 原告 [] ノプエト

原告 [] ノプエト（以下「原告ノプエト」という。）は、一九二六年一〇月二七日にパナイ島イロイロ州ミラグロ町で生まれた。原告ノプエトは、一九四二年三月頃夫 [] ノプエトと結婚した。

一九四四年の乾期（十一月から五月）の頃日本軍は僻地の小さな村へ侵入してきた。原告ノプエトは、当時妊娠しており、日本兵が夜くるかもしれないと



いうことで、近くの洞窟に隠れていたが、翌朝お腹がすいたので家に戻ろうとした時、途中の道で日本兵につかまった。原告ノプエトは抵抗したが、ミラグロの町の中にある日本軍の駐屯地の中のカマリグと呼ばれるニッパヤシと竹で作られた小さな小屋に連れ込まれた。連れ込まれた日の夜、原告ノプエトはその小屋の中で同原告を連行した二人を含めた三人の日本兵から次々に強姦された。この三人の日本兵が原告ノプエトを小屋に監禁して三か月にわたって強姦し続けた。この間原告ノプエトは水道やトイレを使用する時しか小屋の外に出ることができなかった。

アメリカ軍が上陸するという情報が駐屯地の村の市民から伝わった日に、日本兵は駐屯地を放棄したが、その直前に、駐屯地にいたフィリピン人男七名女八名の合計一五人を全部集めて、服を脱がせてその服で手を縛り、うつ伏せに

させて、首を切つて殺した。原告ノプエトは首の後ろを切られ、負傷したが、幸いにも生き残つた。助かつたのは原告ノプエトだけだつた。このように日本軍が駐屯地を放棄したのは、原告ノプエトが監禁されてから三か月位のちで、時期は一九四四年の雨期（六月から十二月）のことだつた。このとき斬られた首の傷は今でも残つており、ときどき疼くことがある。

六 原告

アウスタリ

原告

アウスタリ（以下「原告アウスタリ」という。）は、一

九二三年一月二日、ルソン島ラグーナ州サンタクルス町で生まれた。

原告アウスタリが日本兵に捕まつたのは、一九歳になつてまもない一九四二年一月頃であり、家族の衣類を抱えて、一人で家から少し離れた川岸に降り、洗濯をしていたときだつた。原告アウスタリは、手を掴んで引つ張られ、町の

教会の近くにある一軒の家に連れて行かれた。

原告アウスタリは捕まって三日目に日本兵に強姦された。強姦されたことがシヨックで、何人の日本兵に強姦されたのか、どれくらいの時間耐えていたのか分からなかった。

その日以降も、日本兵からの強姦は続き、その人数も、部屋の前に日本兵が列を作って待っているくらいになって、何人から強姦されているのか分からない状態になった。日本兵は、原告アウスタリが嫌がる態度を見せると殴ったりし、あるときなどは、同原告に犬のようにうつ伏せになるスタイルを強要し、同原告がこれを嫌がると、脇腹を何度も殴ったりした。

原告アウスタリは、トイレに行くとき以外に部屋を出ることを許されなかったし、食事も部屋でとらされ、部屋の外の様子が全くわからなかった。このよ

うな状態で、少なくとも一年以上、原告アウスタリは、監禁され強姦され続けた。

あるとき、原告アウスタリは、日本兵やマカピリらが何か叫び合ってばたばたといなくなったことに気づき、その後、誰の制止を受けるでもなくドアを出てそのまま建物から出て家に帰ることができた。その頃、原告アウスタリは下腹部からのひどい出血が続いていた。原告アウスタリは家に帰った後も出血が止まらず、診療所に行つて注射をしてもらった。しかし、お腹が大きく張つて来て体調はどんどん悪化し、診察してもらうとお腹に血が貯まっていると言われて、原告アウスタリは子宮の摘出手術を受けた。原告アウスタリは、このように体調がどんどん悪化し、手術を受けた頃から半年間位、人を認識することができなかつた。そのような時期に、原告アウスタリの母と父が相次いで亡く



なつた。その後、原告アウスタリは体調も回復し、戦争中の記憶を断片的ながら取り戻すことができた。

七 原告
ポラス

原告
ポラス（以下「原告ポラス」という。）は、一九二九年一月三一日、ミンダナオ島ダバオ市サンタアナ・ストリートで生まれた。

一九四四年十一月のある日の昼頃、原告ポラスは姉と家において、同原告が二階で料理をして姉が下で洗濯をしている時、日本兵が同原告達の家にやってきた。原告ポラスは、捕まると殺されると思い、逃げようとして二階から飛び下りたが、下にある木の株に左足のふくらはぎを突き刺して倒れてしまい、やすやすと日本兵に捕まってしまった。日本兵はコラコラと言いながら原告ポラスを殴り、銃を同原告のこめかみに当て、さらに同原告の髪の毛を掴んだ。そし

て原告ポラスを引きずってトラックに乗せたが、同原告は引きずられる際に右足の親指の爪を剥がしてしまった。

原告ポラスは、イシンという村の入り口の橋の下に作られた防空壕のトンネルの中に入れられた。そして、原告ポラスはその場所で強姦された。抵抗しようとする蹴られ、叫ぶと平手打ちを受けた。そのようにして原告ポラスは次々に四人以上の日本兵から強姦された。その時原告ポラスはなぜそんなに痛いのか理解できなかった。連行されたときのふくらはぎと爪の剥がれた痛さも加わり、体全体が痛んだ。


その日以後原告ポラスは、他の二人の女性と一緒に、毎日のようにそのトンネルの中で日本兵に強姦されることになった。トンネルにはいつも見張りの日本兵が二人か三人残っており、原告ポラス達三人の女性が話をしたりしないよ

うに、また逃げないように、いつも注意を払っていた。原告ポラス達はトンネルの中で洗濯や掃除をさせられたが、食事は外のフィリピン人が作って運んで来てくれた。しかし、そのフィリピン人とも話をすることはできなかった。

日本兵は毎晩のように原告ポラス達を強姦し、時には昼食後にも強姦した。

日本兵達は原告ポラスを強姦するとき、いつも懐中電灯を顔に当てた。最初の強姦の時もそうだった。暗い中で顔に光を当てられるので、相手の顔を見ることはできなかった。原告ポラスは一度だけ偶然に日本兵と顔を見合わせたことがあるが、その瞬間にその日本兵に指で目つぶしをされた。幸いなことに失明には至らなかったが、それ以降は日本兵と顔を合わさないように努めた。また、日本兵の動きに関心を持たないように、いつもうつむき加減にしていた。

原告ポラス達を強姦した日本兵の中に「モリ」という名前の軍人がいた。「モ



リ」は、その部隊の中で最も地位が高い隊長らしく、トンネルの中で日本兵を整列させ、外へパトロールに出ていたりしていた。「モリ」がトンネルにやっけてきて強姦する相手はいつも原告ポラスだった。「モリ」は毎晩帰ってくる原告ポラスのところをやっけてきて、「モリ」のベッドに連れて行き、同原告の肩や当時腰までであった髪の毛を長い間さすったのち強姦した。しかし強姦が終わると原告ポラスは自分の持ち場にもどされ、同原告は壁にもたれて座って寝た。日本兵は皆ベッドの上に寝たが、原告ポラス達は横たわるスペースも与えられなかった。

トンネルの中での生活は八か月にも及んだ。その間一度も外へ出させてもらえず、陽にあたることもなかったので、原告ポラス達はすっかり青白くなり、痩せこけてしまった。掴まった時の原告ポラスの左足のケガは薬をつけること

もできず、痛みが長く続いた。原告ポラスは、当時初潮を迎えたばかりで、日本兵に強姦されるたびに体中に苦痛が走り、もし毒薬があれば自殺したくらいだった。暗いトンネルの中での生活はいつも恐怖心でいっぱい、胃が痛んだ。また最初の三日間程は体の震えが止まらなかった。原告ポラスには現在もその時の後遺症があり、不眠症が続き、神経症になり、神経質になると血を吐くとさえある。家族の支えがあるので最近症状が軽くなったが、心配事があつたりするとぶり返すこともある。

八 原告

■■■■
ヴェリエガス

原告 ■■■■
ヴェリエガス（以下「原告ヴェリエガス」という。）は、一九二五年八月二九日、パンパンガ州のアラヤット山の裾野にあるイログ・カワヤン村で生まれた。

一九四二年三月下旬のある日の早朝、日本兵らは原告ヴィリエガス達の家いきなり入ってきて、二人の日本兵が同原告と姉のヴィルヒーニヤを連れて行こうとした。日本兵は、抗議した父を銃で撃ち、銃剣で胸を刺して殺した。

原告ヴィリエガスと姉は、家から連れ出されると、同じように他の家々から連れ出された未婚の若い女性八人と一緒に、二〇名位の日本兵に連れられて近くの林の中へと歩かされた。原告ヴィリエガス達一〇名を連行した日本兵らは、林の中に到着すると、一旦立ち止まり、何人かの見張りの兵士を残して、ゲリラを探しに行った。夜になると、原告ヴィリエガス達を連行した兵士の数を超える多くの日本兵が林の中に戻ってきた。そして、原告ヴィリエガス達一〇名を林の中でそれぞれ強姦し始めた。原告ヴィリエガスも一人の日本兵に強姦され、同原告は他の女の子達の叫び声を聞きながら意識を失ってしまった。

翌朝、原告ヴィリエガス達は、トラックでマガランの日本軍の駐屯地に連れて行かれた。マガランに着いてみると、日本軍は町役場を占拠しており、その後ろにテントを四〇張位張ってこれを兵舎にし、テント群全体を有刺鉄線で囲んで駐屯地にしていた。駐屯地の出入り口は一か所で、常に日本兵かフィリピン人警察官の見張りが立っていた。原告ヴィリエガス達女性は一人か二人ずつテントに入れられ、同原告と姉とは同じテントだった。

原告ヴィリエガスと姉は、昼間は、洗濯等の用事を言いつけられたこともあったがあまりすることはなく、夜になると強姦された。原告ヴィリエガス達は、その後一か月余りというもの、毎晩毎晩九時頃から、多数の日本兵にテント中の地面の上で強姦された。兵士らは、テントの中で寝起きしていた人だけでなく、他のテントからも来ていたようだった。毎日、毎日、強姦が続き、その

後は疲れて眠り込んでしまっていたので、何人から強姦されたかも分からないくらいだった。原告ヴェリエガスがセックスを拒んで嫌だと言ったりすると、日本兵から殴る打つの暴行を受けたので、言われるがままに強姦されるしかなかった。原告ヴェリエガス達は、洗濯をしたりトイレに行くために短時間テントから出るとき以外は、テントから出ることも許されていなかった。原告ヴェリエガスは逃げ出したかったが、駐屯地は有刺鉄線に囲まれ、常に見張りがあったので、逃げることは不可能だった。食事は、同じテントにいた兵士達が食事をした後の残りで、量はとても少なく、ときには炊いた飯を手のひらに丸く一掴み乗せられ、それだけということもあった。朝食はコーヒーのみで時々サツマイモをもらえるという程度だった。

四月の末に、原告ヴェリエガスと姉は一人ともマラリヤにかかった。寒気が



し、高熱が出ているのに、原告ヴィリエガス達は一週間以上もの間、薬ももらえずに放っておかれた。やせ細った原告ヴィリエガスらを見た年配のフィリピン人の警察官が駐屯所の上官にいったん家族のもとに返して体を治させてはどうかと交渉してくれ、同原告達は、必ず帰ってくるという約束の下、五月になつて、ようやく門から外に出ることができた。

原告ヴィリエガスは、日本兵に監禁され強姦され続けていたことを思い出す度に、非常に怖くなり、怒りでいっぱいになり、強姦した兵士達を殺してやりたいという気持ちになる。

九 原告 [redacted] ナシーノ

原告 [redacted] ナシーノ（以下「原告ナシーノ」という。）は、一九二八年

三月二七日にパナイ島イロイロ州バタド郡で生まれた。

一九四三年の米の収穫期（三月から四月か七月から八月）のあと、原告ナシーノはエスタンシア町の祖母の家に向かって海岸沿いの森を歩いている時に数十人の日本兵に出会った。そのうち五人程の日本兵が原告ナシーノに近づいてきて、同原告を捕まえた。原告ナシーノは他の八人の女性と一緒に後ろ手に縛られ、日本兵に囲まれて、歩いて駐屯所に連れて行かれた。原告ナシーノはこの駐屯所の中の小さな暗い部屋に閉じ込められた。鍵はかかっていたが、監視がついていた。

原告ナシーノは、ここで三人の日本兵から強姦された。強姦後、原告ナシーノが気がついたら、左の太股に傷がありひどく出血していた。

一九四三年か一九四四年頃、原告ナシーノは、部屋の外を通った知り合いの行商人を呼び寄せ、町長に知らせて助けるように頼んだ。町長は原告ナシーノ

の母の知り合いで、この人が日本軍とかけあってくれ、翌日、同原告は駐屯地から出ることができた。

原告ナシーノは、日本兵に監禁され、強姦されたことを決して忘れることができない。

一〇 原告 ■■■ ハモット

原告 ■■■ ハモット（以下「原告ハモット」という。）は、一九二四年一月二二日、サマール島のカルバヨグ市で生まれた。

一九四四年頃、突然一五人位の日本兵がトラックに乗って原告ハモットが当時住んでいたカロオカン市内のアパートにやってきた。日本兵は、そのアパートに住むすべての男達を捕まえて軍用トラックに乗せた。女性も全員集められた。日本兵達は大半引き上げたが、上官らしい白い襟の服にサーベルを下げた

軍人が残っていた。彼は、原告ハモットの所に近づいてきて、原告ハモットの服を切り裂き、田んぼの中の近くの草の生えている丘のような所に連れて行った。その日本軍人は、原告ハモットを草むらの中に押し倒し、同原告の両方の膝を足で踏みつけ、片手でサベールを抜いて同原告を脅した。原告ハモットは、抵抗すればサベールで危害を加えられると思ったので、何もできず強姦された。原告ハモットは当時内縁の夫と同居しており、そのとき妊娠二か月だった。

強姦後、その軍人は原告ハモットを他の女性達のいるところに連れて行った。原告ハモット達女性六人は、そこからそれほど遠くないビノンドのオラカという鉄筋三階建の大きなビルに連れて行かれ、他の一〇人程のフィリピン女性とともに一部屋に集められた。そして、日本兵が三名、部屋の中に入ってきて、原告ハモットを選び、大部屋の隣にある他の小部屋に連れて行った。原告ハモ



ットは、三名の日本兵から強姦された後、大部屋に戻された。同夜の未明の頃、再び二名の日本兵がやってきて、原告ハモットを小部屋に連れて行き、そこで同原告を順番に強姦した。大部屋の前には二名の兵士が見張りをしており、小部屋の前や建物の門の所にも見張りがあり、逃げ出すなどということとはとても考えられなかった。

原告ハモット達一六人の女性は、軍服等の洗濯や掃除、食事の世話をさせられた。原告ハモット達は、日本兵用に作った食事の残りを食べていた。日本兵は、時には昼間から、たいていは夕食後、一階の大部屋に入ってきて、原告ハモット達の腕を掴み、隣にある小部屋に連れ込んで強姦した。原告ハモットは、最初の頃で一日に五人位、その後は三、四人の日本兵から強姦された。時々原告ハモットは抵抗して、額を殴られたり、声を出そうとしたときに口元を殴ら

れたり、さらに蹴りつけられたりした。このように、監禁され絶え間なく強姦されるという生活は三週間続いた。

ある日、アメリカ軍の爆撃があり、原告ハモットは他の女性とともに軍用トラックに乗せられ、近くのサンチャゴ要塞に連れて行かれた。そこで警備をしていた兵隊が原告ハモットを引き下ろした。他の女性達は、トラックに乗せられたままだった。そして、彼らは、原告ハモットを要塞の中の木のそばに連れて行った。三人の警備の日本兵がその場で原告ハモットを次々と強姦した。破壊された壁の残骸が散乱した場で強姦されたため、身体が大変傷ついた。日本兵の強姦の仕方也大変荒く、そのために出血した。その後、原告ハモットはトラックに再び乗せられた。

それから原告ハモット達は、サン・アグスティン教会という大きな古い教会



に連れて行かれた。教会の中には、たくさんのフィリピン人の男性と幾人かの子供が入れられていた。そこへ日本兵がマシンガンを発射した。それで原告ハモットは気を失ってしまった。再び気を取り戻したときには、周りからうめき声等が聞こえた。原告ハモットは一人で教会の外に逃げ出し、大きな壁の角になつているところに隠れていた。そこで、原告ハモットは流産し、その後しばらく意識が遠くなり、気がつくとも英語を話している声が聞こえた。原告ハモットは、手を振ってこのアメリカ兵に助けを求めた。

一 原告



サンティリアン

原告




サンティリアン（以下「原告サンティリアン」

という。）は、一九二〇年三月三〇日、ルソン島北部にあるパンガシナン州リ
ンガエン市で生まれた。原告サンティリアンは、リンガエン市で小学校を卒業

した後、マニラ市内のデ・オカンポ病院で看護婦の勉強をしながら、母が経営する食堂を手伝っていた。

一九四二年二月一五日、原告サンティリアンは、日本の将校達に、日本軍が駐屯していたトゥトゥバン駅の南側にあった将校達の本部まで連行された。

原告サンティリアンは、建物の二階にあったエアポートスタジオの部屋に連れて行かれ、その日の晩にさらに別の部屋に連れて行かれ、日本軍の将校サクマにベッドに押し倒され、レイプされた。原告サンティリアンは、部屋を連れ出される際、抵抗したため、サクマによって、胸を軍靴で蹴りつけられ、服を引き裂かれ、銃剣で三回左足の腿を突き刺された。また、原告サンティリアンは、レイプされている最中にも何度か平手打ちをされた。レイプされた後、服を引き裂かれてしまったため、原告サンティリアンはタオルだけを身につけただけ



でエアポートの部屋に連れ戻された。銃剣で突き刺されたけがは、血を拭いただけで特に治療を施されず、化膿してしまった。胸のけがも痛んだが、これについても当時治療を受けることはなかった。

その後は一週間に二晩程来ない晩があったが、それ以外は毎晩将校にレイプされた。特に水曜日には多くの将校達が来ていたようだった。多いときは一晩で七人から一〇人程の軍人にレイプされた。

その後原告サンティリアンは、日中は将校達の三度の食事を作り、夜はレイプされるという生活を、一九四四年にエアポートスタジオを逃げ出すまで強いられた。エアポートスタジオのドアにはすべて鍵がかかっており、フィリピン人の見張りが一人いた。出入り口のドアには小さな穴があり、そこから廊下を見るとその見張りが立っているのがわかった。

原告サンティリアンは、一九四四年、従兄弟の助けにより、エアポートスタジオを逃げだし、その後病院へ行った。病院では、銃剣で刺された左足を見てくれ、傷がまだ化膿しているから、これが治らないと足を切らないといけな
と言われた。原告サンティリアンにはそれまで、膿を出す程度のことしかでき
なかつたため、一年以上経っていても治っていなかつたのだつた。また、右脇
の肋骨と蹴られた胸骨のあたりが骨折しており、さらに喘息の症状もあるとい
うことだつた。その病院には一か月程入院した。

原告サンティリアンは、日本兵から受けた仕打ちを決して忘れることはでき
ない。サクマは原告サンティリアンの人生を台無しにしたのである。原告サン
ティリアンは今もサクマに蹴られた胸が痛むとともに、心が痛む。

原告

マリラグ（以下「原告マリラグ」という。）は、一九二五年二月一三日アリバイ州プランギで生まれた。

一九四三年四月一六日頃、原告マリラグは、当時リサール州ナルシアのサンパロック地区に住んでいたが、ミサに参加するため、近くのセント・トマス大学に向かっていた際、突然銃を発砲された。そして、日本兵がきて、両手で原告マリラグの耳をはさむように、思い切り平手でたたいた。そのあと日本兵は、原告マリラグを前に突き倒したので、同原告は道にあった石に額とあごを打って気を失ってしまった。気が付いたとき原告マリラグは、その日本兵によって日本軍の車（白い車）に乗せられるところだった。そのとき、原告マリラグの耳や額から血が出ていた。車で一五分程乗せられたあと、プラザ・サンタクルス橋の近くで下ろされた。その橋を渡ったところには、日本軍が食堂に使って

いた建物があつた。原告マリラグは車から降ろされたあと、その橋の柱にしばりつけられ、そのまま夜二時頃まで放っておかれた。

そのあと、日本兵が二人来て、原告マリラグを車に乗せツツバン駅から東へ少し行ったところにある、グレゴリオ・デル・ピラール小学校につれて行った。そこは日本部隊が接収して駐屯所として使用しており、一〇〇〇人位の日本兵がいた。小学校に着くと、教室の中に入れられ、そこで日本軍の将校にレイプされた。そして、そのあとも一週間に三、四回、その将校が部屋に入ってきてレイプした。多い時は一日三回もレイプされた。外には見張りの兵士がいたので逃げることはできなかつた。いつ殺されるかも知れないと思い、毎日のように神に祈つた。

原告マリラグは、つかまつてから一か月程して釈放された。原告マリラグは、

監禁されている間服を着せてもらえないことが多かったため、体が弱くなり、咳き込むことが多くなった。原告マリラグは、この体験を決して忘れることはできない。

一三 原告
[黒塗り] アルコベル

原告 [黒塗り] アルコベル（以下「原告アルコベル」という。）は、一九二六年七月二六日に生まれ、その後レイテ島タクロバン市サンホセ地区コゴン村で暮らしていた。

原告アルコベルは、一六歳だった年のある日、弟とともに、銃や刀を持った日本兵に手を掴まれ、引きずられるように連行された。原告アルコベル達は一キロ位歩かされて、サンホセの海沿いにあった飛行場のそばの日本軍の駐屯所に連れて行かれた。駐屯所につくと、原告アルコベルは、弟と引き離され、駐

屯所のなかの女性ばかり三〇名位が集められていた宿舎に入れられた。

この宿舎では、銃を持った兵隊が常にいて交代で原告アルコベル達を監視していた。原告アルコベルはそこへ連行されてから、毎朝、日が昇ると点呼を受け、他の女性達とともに塹壕を掘り、砂を袋に詰めて塹壕沿いに積み上げる仕事をさせられた。このような力仕事は朝から夕方まで続き、原告アルコベルにとっては大変な重労働の日々が続いた。しかし出される食事は、米と塩に豆等が付くだけの非常に粗末なものであったうえに、量も少なく、原告アルコベルはいつも空腹と乾きに苦しんでいた。原告アルコベルと一緒に連行させられた弟は、重労働のすえに、少ない食事と強い日差しの中で脱水症状を起こして亡くなった。

連行されて三日後、原告アルコベルは、日本兵に強姦された。その夜、日本

兵が宿舎にやってきて、原告アルコベルを含め三〇人ほぼ全員の女性を選び出し、同原告達は近くの浜辺まで連れて行かれた。そこには、數十人の日本兵が待ち構えていて、ココナツヤシやバナナの木の下の、すぐに原告アルコベル達を強姦し始めた。最初に強姦されようとしたとき、拒絶したために原告アルコベルは平手打ちされ、その場に倒れ込んでしまった。そのとき、左脇を下にして強く体を打ったので、左鎖骨が折れてしまった。それでも日本兵はそのままに倒れた原告アルコベルの股の付け根を銃剣で刺し、血を流しているのもかまわず強姦してきた。その夜、原告アルコベルは何人も日本兵に次々と強姦され、宿舎に戻されたのは朝六時頃だった。鎖骨の骨折及び足の負傷に対しては何の治療もしてもらえず、翌日もそれまでと同じように日中の労働に出るようにと命令されて、原告アルコベルは働かざるを得なかった。そのため、原告ア

ルコベルの左肩は今でも変形したままである。

その後も、原告アルコベルは、毎日、一晩に二、三人から八、九人位の日本兵に強姦されるようになった。日本兵達は、每晚原告アルコベル達を連れ出し、海辺で、行列を作つて原告アルコベル達を強姦し続けた。生理中であつても原告アルコベルは日本兵の相手をさせられた。

原告アルコベルは、このような目にあわされるまで、性的経験も知識も何もなかったので、性行為の相手をさせられることに対して頭が混乱するほどの恐怖を感じていた。その当時、原告アルコベルは日本人が本当に怖くなり、日本兵の帽子も、服も、ズボンも、もうそれを見るだけで頭が混乱し、恐怖でいっぱいになった。原告アルコベルは逃げ出したいと思つていたが、見張りがいつも目を光らせていてできなかった。死んだ方がましだとも思つたが、見張りが

いるためにそれもできなかった。

このような生活が、一九四二年から二年間以上も続いた。一九四四年の秋頃になってアメリカ軍の空襲や砲撃が始まった頃、原告アルコベル達は、やっと逃げ出すことができた。原告アルコベルは、逃げ出した後、再び家族と一緒に暮らせるようになったが、コゴンの村には一度も帰れなかった。村の人達は原告アルコベルが日本兵から強姦されていたことを知っているに違いないと思ひ、帰ることができなかつたのである。

その後、原告アルコベルはフィリピン人男性と同棲するようになり、結婚話も出て、妊娠した。しかし、彼に原告アルコベルの強姦の体験を話した人がおり、その人が「お前は日本人の残りものを妻にしている。」と言ったのがきっかけで、彼は原告アルコベルとは話をするこゝもなく家を出て、それきり帰つ

てこなかった。

一四 原告

ヴィラヌエヴァ

原告

ヴィラヌエヴァ（以下「原告ヴィラヌエヴァ」という。）

は、一九二二年九月二三日、ネグロス島のパゴ市で生まれた。

原告ヴィラヌエヴァは、日本軍がやってきた当時二二歳で、ヒニガラン・シ
ツチヨ・パグリオンにある市場でエビを売って生計を立てていた。日本の兵隊
は、しばしば原告ヴィラヌエヴァのところへエビを買いにきていた。その中の
一人にヤマトという人がいた。ヤマトが原告ヴィラヌエヴァのところへエビを
買いに来るようになってから約二週間後、ヤマトは、同原告を市場から駐屯地
近くにあった同原告の祖母の家に無理矢理連れて行き、そこで同原告を強姦し
た。ヤマトは原告ヴィラヌエヴァに、「言うことを聞かないとシツチヨにある

家を放火するぞ」と脅し、それ以降約三か月間、しばしば祖母の家に連れて行って強姦し続けた。

その後約一〇か月間、ヤマトは、駐屯地内にあった軍人の住んでいた地域の小さな一軒の家に原告ヴィラヌエヴァを住まわせ、強姦を続けてきた。

原告ヴィラヌエヴァは、強姦に対し何度も抵抗を試みたが、ヤマトは力づくで強姦をし続けた。原告ヴィラヌエヴァは、何度も逃げたそうと考へた。しかし、ヤマトからたびたび「逃げたら殺すぞ」と脅されていたし、駐屯地の周辺は柵が張り巡らしてあり、その出入口は銃を持った兵隊の守衛がいたので、とうてい逃げ出せる状況ではなかった。ヤマトからの性行為を強いられた結果、原告ヴィラヌエヴァは妊娠し、一九四五年三月一三日にヒニガランのジャングルの中の川のそばで、子どもを生んだ。その子は現在、ミンダナオで生活して

いる。

原告ヴィラヌエヴァは、日本の兵隊に強姦され続けた忌まわしい過去をずっと胸の中におさめ、誰にも話さなかった。また、子どもをかかえながらエビ売りをしていたこと等、生活のうえでも大変な苦勞を強いられた。原告ヴィラヌエヴァは今日まで、ヤマトの行為をずっと憎しみ、怒りの気持ちを持ち続けてきた。

一五 原告 [REDACTED] ロペス

原告 [REDACTED] ロペス（以下「原告ロペス」という。）は、一九二二年四月二〇日、パンパンガ州サンフェルナンド地区のサンペドロ・クトウッド村で生まれた。

一九四二年三月のある夕方四時頃、サン・フェルナンド地区のデル・ロサリ

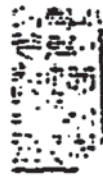
才村に日本兵一〇人位が軍用トラックでやってきた。日本兵は、あちこちの家を襲い、当時、同村に住んでいた原告ロペス達の家にもやってきた。「カプヤシ」とか「コバヤシ」と呼ばれていた一人の日本の将校が原告ロペスを殴ったり、着ていたワンピースを引きちぎったりして、無理矢理引張って軍用トラックに乗せて連行した。原告ロペスは一人だけトラックに乗せられ、そこから一、二キロメートル位のところにあるシンダランの小学校に連れて行かれた。そこには、日本軍の部隊の本部があり、たくさんの日本兵がいた。原告ロペスは、辺りが暗くなりかけていた頃、一階建の校舎の中の教室に押し込められ、鍵を掛けられて閉じ込められた。

その日の夜、コバヤシが部屋に入ってきた。原告ロペスは抵抗したが、コバヤシに殴られたり足で腹を蹴られたりして、無理矢理三回強姦された。当時原

告ロペスは処女だったので出血した。その日から教室の外には見張りが立ち、コバヤシは一日おきに多いときは昼二回、夜二回以上原告ロペスを強姦したが、そのようなことが約三か月続いた。原告ロペスは抵抗しなかったが、部屋に入ってくるコバヤシを見ただけでも恐ろしく、どうすることもできなかった。

部屋に監禁されている間、食事は日本兵が持ってきたが、見張りがいる間は食べられず水だけを飲んでいたので、原告ロペスはとても痩せ、また、心臓の病気になった。原告ロペスは排便のため教室を出てトイレに行くことも許されず、ボウルのような器を床に置き、そこで用をたすよう強要され、また、水浴びも日本兵が水を持って来て、その部屋の中でさせられた。

監禁されてから約三か月後の一九四二年六月一日夕方六時頃、ゲリラがこの日本軍の本部を襲ったので、本部は大混乱に陥った。原告ロペスはそのす



きに木製の開き窓を壊して逃げ出し、家に戻った。原告ロペスは、それまでの苦しい体験もあって、自分にはもう未来はないと思い、その夜、家の外にある台所で自殺しようとした家の中にあつた殺虫剤を飲んだ。幸い、近所の人が見つけた。ココナッツミルクを飲ませてくれたので、原告ロペスは殺虫剤を吐き、なんとか助かった。翌日母親が病院に連れて行ってくれ、医者から心臓が悪いのでしばらく安静にしていなさいと言われた。

健康状態は、今はそれほど悪くない状態だが、戦争中の体験を思い出すとてもつらく、震えがきたりドキドキしたりする。

一六 原告

メルカード

原告

メルカード（以下「原告メルカード」という。）

は、一九三三年二月二日、ピコール地方のソルソゴン州ソルソゴン町パンパン

で生まれた。

一九四四年になった頃、ゲリラの上官から手伝いをして欲しいと頼まれ、原告メルカードは、若い女性一〇人でこれに参加するようになった。原告メルカードがゲリラに参加してから数か月程したある日の午後一時頃、日本軍が来た。日本兵は特に発砲することはなく、やってくる、「お前達は何故ここにいるのか。」「ゲリラの妻か。」と聞いて来た。原告メルカード達が「ここでゲリラの食事を作っているだけです。私達はゲリラの妻ではありません。」と答えると、日本兵は怒りだし、平手打ちをしてきた。

日本兵は原告メルカード達をトラックの荷台に乗せ、ソルソゴンのサンパロックにあった日本軍の駐屯地に連れて行った。そこには、広場になっている敷地中央のあたりに木造の二階建の大きな建物があり、原告メルカードらはそこ

の一階の部屋に監禁された。

監禁されてしばらくすると、突然、日本兵が原告メルカード達のいた部屋にやってきた。その日本兵はまず原告メルカードを強姦した。原告メルカードはさらに二人の日本兵からも順番に強姦された。最初に原告メルカードを強姦した日本兵は、入ってくるなり立っていた原告メルカードを平手打ちにし、すぐにベッドの上に押し倒した。原告メルカードは、横向きになって抵抗したが、その日本兵は同原告の体の向きを強引に上向きに変えて強姦した。原告メルカードは、抵抗すれば殺されると思ってそれ以上抵抗せず、目をつむり、神に祈りながらひたすら耐えた。他の女性も同じように強姦されたようだった。

原告メルカードは、初めての経験だったので下腹部に激しい痛みを覚え、多量の出血があった。同じ部屋で強姦された他の四人の女性もうめいていたり、

叫んでいた。原告メルカードはその日はよく眠れず、発熱し、立つて歩くこともできない状態だった。翌日以降三日間は強姦はなかった。しかし、その後また強姦されたり、原告メルカードが抵抗すると平手打ちをされるようになった。週に二、三回、大体三人位の日本兵が昼間のうちに来て強姦した。

原告メルカードは、他の四人の女性と同じ部屋にずっと監禁されていた。日本兵はときどき原告メルカード達の様子を見に来た。とても逃げられるような状態ではなかった。トイレは部屋の外の同じ建物の一階にあり、そこで用を足したが、それ以外は部屋の中から出ることはできなかった。トイレへ行った時も、日本兵がトイレのドアの外に立って見張っていた。食事は、日本兵が一日二、三回、原告メルカード達が監禁された部屋まで持ってきた。野菜やおかゆが主だった。

このような生活が約一か月続いたある日のことだった。その日は将校だけが原告メルカードを強姦した。その人は他の日本兵と違い、物分かりがよさそうだったので、原告メルカードはその将校に逃がしてくれるよう頼んだ。原告メルカードが将校に頼んでから三日程して、同原告は解放された。

原告メルカードは、一九五五年今の夫と一緒に生活するようになった。その夫との間に六人の子どもをもうけた。この夫には原告メルカードの経験は話さなかった。原告メルカードが「従軍慰安婦」の名乗りをあげると、夫は初めて同原告の経験を知った。すると、夫は、よく文句をいうようになり、同じ家に住みながら部屋を分けて別々に生活するようになった。夫は生活費も出してくれず、子ども達も夫の方につき、原告メルカードを無視している。原告メルカードは、今、非常に神経質になっており、夜もよく眠れないことがある。

一七 原告
フェルナンデス

原告
フェルナンデス（以下「原告フェルナンデス」という。）
は、一九二七年七月一〇日、マニラ市シンガロン地区のタゴノイ・ストーリー
トで生まれた。

一九四四年一二月頃のある日の夜、シンガロン地区の家で原告フェルナンデ
スの家族みんなが寝ていると、突然日本軍が襲ってきた。四人の日本兵が家の
ドアを蹴破って中に入ってきた。日本兵は抵抗する父親の首をはねて殺した。

原告フェルナンデスは父の首がごろごろと転がっていくのを見た。母親も抵抗
したために腹部を刺されて殺された。原告フェルナンデスが日本兵に連れられ
ていくその目の前で、二人の妹（二女と三女）も胸を刺されて殺された。原告
フェルナンデスはめまいと吐き気を感じ、ひどいショックと恐怖で頭の中が真



つ白になった。

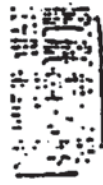
原告フェルナンデスは、日本の日の丸の旗が付いている灰色の自動車に乗せられて、他の四人の女性と一緒に古い教会に連れて行かれた。この教会では原告フェルナンデスだけが降ろされ、その教会の中の一つの部屋に閉じ込められた。周囲をセメントで囲まれ、小さな窓が上のほうにあるだけの薄暗い部屋で、中には家具も何もなく、セメントの床がむき出しのままだった。

当時原告フェルナンデスは、まだ初潮はなかったが、連行されたその日、連行してきた大柄な士官に強姦された。士官は、原告フェルナンデスの太股を殴った後、その服を脱がせて強姦した。体中が拷問を受けたようにいたる所に痛みを感じ、父や母と同じように死んだほうがましだと思った。

その後、原告フェルナンデスは毎日一人から三人の日本兵によって、部屋の

中で強姦された。部屋には原告フェルナンデス一人だけで、二人の見張りが外におり、食事はその見張りの兵士が運んできた。原告フェルナンデスは、逃走を試みたが発見されすぐに見張りの日本兵に捕まったことが二回あった。原告フェルナンデスは、この時、日本兵から平手打ちを受けたり、殴られたり蹴られたりした。原告フェルナンデスは、二、三か月間そこに監禁された。

一九四五年一月の終り頃、アメリカ軍が日本軍を攻撃する銃撃が聞こえてきた。そしてある朝一〇時頃、日本兵が慌ただしく走り回って逃げようとしていたので、原告フェルナンデスもドアを開け逃げようとした。そこへ原告フェルナンデスを最初に強姦した士官が軍刀を抜いて切りつけてきた。原告フェルナンデスは、軍刀の刀身の光を見て両親の殺された時のことを思い出すと同時に、軍刀で右肩を切りつけられ気を失った。原告フェルナンデスが意識を取り戻し



た時には誰もおらず、血はすでに乾いていた。原告フェルナンデスが外に出ると、アメリカ軍のトラックが通り、彼らは同原告をテントに連れて行き治療した。原告フェルナンデスは約一か月間そのテントにいた。原告フェルナンデスの右腕の傷は治ったが、右肩から右腕にかけて大きく変形し、重い物を持てず肩から上に腕を上げることができない。原告フェルナンデスはもともと右利きだったので左手中心の生活はずいぶんと不便で辛い思いをしている。

原告フェルナンデスは、長い間喘息と肺炎の病気に悩まされてきた。特に喘息のために長い間苦しめられてきた。この喘息は、日本軍に監禁された時の床がセメントで冷たかったためだと思われる。

一八 原告  ボルナレス

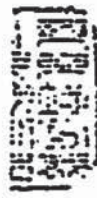
原告  ボルナレス（以下「原告ボルナレス」という。）は、一九一

七年十二月二日、パナイ島にあるカピス州パニタン町バランガイ・カラアンで生まれた。

一九四二年四月に日本軍はロハスに入り、間もなくパニタン町中心部を占領した。その後間もなく沢山の日本兵が原告ボルナレス達の地域にやってきた。

ある日の夜一時頃日本兵が原告ボルナレス達の家に入ってきた。原告ボルナレスは二階にいたが、一人の日本兵が二階にあがってきた。日本兵は原告ボルナレスを見つけて「ダラガ、ダラガ（娘、娘）」等と叫びながら同原告の手を捕まえて縛り、家の外に引っ張り出そうとした。

そのまま原告ボルナレスはその日本兵達にパニタン町の中心部にある公設市場に徒歩で連れて行かれた。公設市場は日本軍がきてから駐屯地にされており、市場としては使っていなかった。日本軍は、公設市場として使っていた天井付



きの建物の中にテント地で四方を仕切って部屋を作っていた。

日本兵達の中の一人が原告ボルナレスをその部屋の一つに連れ込み強姦した。結局その晩は代わる代わる六人の日本兵に強姦された。部屋の床はコンクリートの上にテント地の布が敷いてあるだけで、ベッドのようなものもなかった。

その後も原告ボルナレスは、公設市場の中の仕切られたその同じ部屋の中で、日本兵によって強姦され続けた。一日に一人か二人のこともあった。時には一日に一〇人ということもあった。原告ボルナレスは自分の部屋を出ることは自由だったが、公設市場からは自由に出ることができず、トイレや洗濯の時にも見張りがついていた。そのため逃げ出すこともできなかった。

原告ボルナレスは、この公設市場に連れて来られてしばらくたってから、隙

をねらって逃げ出した。

原告ボルナレスは、日本軍駐屯地での生活で体をこわしたために、腰のあたりがいつも痛み、充分には働けなくなった。

一九 原告

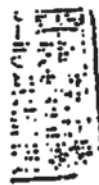
バリサリサ

原告

バリサリサ（以下「原告バリサリサ」

という。）は、一九一九年一月一七日、ルソン島東南部ビコル地方のアルバイ州レガスピ市で生まれた。そして、原告バリサリサは、一九四一年五月結婚し、二人の娘を儲けた。

原告バリサリサが日本兵に連行されたのは、一九四四年の早い時期だった。原告バリサリサの夫が仕事で出かけていたとき、日本軍のコバヤシという将校が何人かの日本兵を従えて軍用車でやってきて、原告バリサリサを車に乗せ、



山にある駐屯地に連行した。将校のコバヤシは、原告バリサリサを駐屯地にある建物の中に入れてイスに座らせ、同原告をコバヤシ専属の「慰安婦」にする、他の将校が一週間に三、四回、各三、四人ずつ訪問するから、彼らにも同じように性的サービスをするように、と英語で言った。翌朝、コバヤシがその小部屋に入ってきて、原告バリサリサをレイプした。コバヤシはレイプが終わると、一瞬原告バリサリサのことを見おろし、小部屋を出ていった。このような辱めを受けることは、原告バリサリサのそれまでの生活ではとても考えられないこととで、悲しくて死んでしまいたいほどだった。コバヤシが憎くてたまらず、殺してやりたい気持ちだった。家族のことやこれまでの原告バリサリサの人生すべてを思い起こし、それらが踏みにじられたという思いを強く抱いた。

原告バリサリサはその次の日の昼頃にも同じようにレイプされた。その後も

コバヤシからは数日おきにレイプされた。原告バリサリサは、コバヤシにビジターに対してもサービスするようにと言われており、週に二、三回、三人ないし四人の将校が来ては原告バリサリサを強姦するようになった。

原告バリサリサは逃げたくてたまらなかったが、その建物の周りには日本兵がたくさんいて、とても逃げられなかった。また、三〇代の女性が逃げようとして射殺される場面を建物の窓から見たこともあり、とても逃げる気持ちは起きなかった。

監禁されてから一年二か月位経った頃、たぶん一九四五年の二月から四月位の間のことだった。ある日、突然爆撃の音が聞こえてアメリカ軍の攻撃が始まった。慌てたコバヤシは原告バリサリサのことなど見向きもせず、書類を急いでまとめ、最後の車に乗って去っていった。日本兵はすっかりいなくなり、女

性達が逃げていくのが見えた。それで原告バリサリサもその建物から逃げ出した。

夫は、家に戻った原告バリサリサを伝染病患者のように扱い、同原告は久しぶりに再会した子ども達を抱きしめることも許されず、ただ泣くしかなかった。夫は家を二つに分けて原告バリサリサが夫や子どもに近づけないようにし、子どもには「お母さん」と呼ぶことを禁じた。両親や親戚も、汚いものを見るように原告バリサリサを見た。原告バリサリサは「日本兵の残り物」として蔑まれた。

原告バリサリサが一番辛かったのは、ビジターの将校から暴力を受けたことだった。ある時ビジターの将校の一人がずっと泣いたまま何も答えない原告バリサリサに腹を立てて、原告バリサリサの背中を思いきり軍靴で蹴った。原

告バリサリサは、倒れかかり、脇腹をベッドに強くぶつけてしまった。その将校は、その直後に原告バリサリサを強姦した。その衝撃は非常に大きく、その影響は今も残っていて、背骨がずれており歩行に障害がある。またコバヤシからも平手打ちなどをされたことがある。

二〇 原告 ■■■■■ バラハディア

原告 ■■■■■ バラハディア（以下「原告バラハディア」という。）は、一九二八年四月二二日、ルソン島中部ヌエバ・エシハ州カピアウ町サンピセンテで生まれた。

戦争が勃発し、原告バラハディアの家族がイサベラ州に移動し、ドゥマタタというところに移住していたある日、他の避難していた家族の女性達五人位と一緒に同原告が洗濯していると、七人から八人の日本兵がやってきた。彼らは、

原告バラハディアを無理矢理に一人の日本兵が乗っていた馬に乗せようとした。原告バラハディアがそれに抵抗していると、いきなり後頭部を何かで殴られて気を失ってしまった。気がついたら、サンチャゴの町の町役場に連れて来られていた。

原告バラハディアはこの日に途中休憩、食事をはさんで七回にわたって、その日本兵から強姦された。非常に恐ろしく、やめてくださいということを嘆願するくらいで身体的な抵抗はできなかった。そのように原告バラハディアが頼むのに、その日本兵は、強姦が終わると笑っているだけで、休憩してまた強姦するということを繰り返したのだった。

監禁されている間、原告バラハディアに出される食事は、カモテンカーホイ（芋類の葉）、野菜、卵等だった。日本兵も、同じ部屋で一緒のものを食べて

いた。原告バラハディアがあまり食べないと平手打ちをされたりした。

原告バラハディアを連行した日本兵は毎朝出掛けて、一時間程度で帰ったり、午後に戻ったりした。帰ってきてからは、その部屋におり、夜は必ずその部屋で寝ていたが、家に帰ってきてから夜中まで、原告バラハディアを強姦していた。このように毎日絶え間なく強姦され続けた。

日本兵は、何かきっかけがあると度々原告バラハディアに対して暴力を振るった。あるときは、マッサージを指示されたのに、原告バラハディアが嫌だったので横を向きながらしていたところ、怒ったその日本兵に大きいピストルで殴られ、同原告の左耳から液が流れ出て、それがしばらく止まらず、耳はしばらく聞こえなかった。そのほか、食事の時や話をしているときにもよく殴られた。



監禁された日から数えて八日目の夜中の二時位に、原告バラハディアは監禁されていた部屋から逃げ出すことができた。原告バラハディアは精神的に大変打撃を受けていたので、脱出してから六か月間位謔言を言い続けた。それらは、

「ノーサー」とか「そういうことをしないでください」というものであり、夜中に服を脱いで突然このようなことを言い出すというものだった。母親は原告バラハディアが気がおかしくなったと考え、大変心配していた。また、監禁中絶え間なく強姦されたことから、母親は、原告バラハディアの妊娠を心配し、一か月間位大変苦い薬草を飲ませたり、様々なマッサージを施した。

監禁され強姦され続けたこの経験については、いまでも強く思い出され、泣き出してしまうことがある。思い起こされる記憶は、とても生々しいものであり、原告バラハディアにはこれから先も忘れることなど決してない傷跡となっ

ている。

二二

原告

サンティリアン

原告

サンティリアン（以下「原告サンティリアン」と

いう。）は、一九二八年一月七日にパナイ島のアンティケ州パンダン町マグアバで生まれた。

原告サンティリアンは、一九四三年一〇月三日、パンダン町のポットポットの近くの山の中の洞窟に隠れていたところを日本兵に見つかってしまった。原告サンティリアン達は全員アバカという繊維で作った親指ほどの太さのロープで後ろ手に縛られ、谷間の滝のところまで連れて行かれた。そしてここで捕まった住民のうち女性が日本兵に強姦された。女性は六人だった。母親、姉のアデライダ、そして原告サンティリアンも強姦された。原告サンティリアンは五

人位の日本兵に次々に強姦された。日本兵はフィリピン人の男性を殴り、日本刀でその首を切り落としていった。兄のプロコピオは、日本兵から「おまえはゲリラではないのか」と言われ、違うと答えたが、棒で殴られ、日本刀で首を切られて殺された。母親は、横で兄が殺されたのを見て泣き叫んだ。すると日本兵は母親の右目を銃剣で突き、やはり首を切って殺した。日本兵は、姉のアデライダの長い髪の毛を左右にわけて前にたらし、首のうしろの地肌を出した上で首を切った。また二歳と三歳の男の子がいたが、日本兵はその子供を投げ上げて、別の日本兵がそれを銃剣で受けて刺し殺した。二歳の男の子はそのあとさらに後頭部を銃剣で切られ、いずれも殺された。原告サンティリアンは、「ゲリラをみた」と答えたから殺されなかった。

正午前に日本兵は、死体をそのまま放置して、原告サンティリアン達二人を

連れてカブルアンという村の方に移動した。三キロメートル程行ったカブルアンの村のニツパハウスで一休みした。原告サンティリアンは、ここで日本兵に再び強姦された。

翌日夜明けとともに、日本兵は移動をはじめ、三時間程歩いてブラボドについた。その日の午後二時か三時頃、ここで原告サンティリアンは日本兵から解放された。原告サンティリアンは、マグアバの自宅に戻り、残った家族と一緒に暮らした。父親は、母や兄、姉が日本兵に殺され、同原告が日本兵に強姦されたことなどを聞くと、ひどくショックを受けて泣いた。近所に住むほとんどの人が原告サンティリアンが強姦されたことを知っていた。原告サンティリアンはこのような体験から結婚する気にもなれず、結婚しなかった。

一三一 原告 XXXXXXXXXX カランザ

原告
カランザ（以下「原告カランザ」という。）は、一九一四年
一〇月一四日、ルソン島東南部ビコール地方の南カマリネス州イリガ市で生ま
れた。原告カランザは、一九二八年、一四歳の時に結婚し、三人の娘と一人の
息子を儲けた。

日本軍が原告カランザの住んでいたクリ村に来たのは、一九四二年九月の早
朝だった。原告カランザが家で一番下の子である赤ん坊をあやしていたところ、
日本軍の将校とフィリピン人の通訳が家に入ってきた。その通訳人は、その日
本軍将校をキャプテン・オオタグロと言っていたが、日本軍は、原告カランザ
達の家が隠れ家に適しているので滞在したいという事だった。原告カランザは
それは困ると通訳人に言ったが、聞いてもらえなかった。夫と息子は、付近の
案内のために原告カランザ達の水牛と一緒に他の日本兵に連れて行かれた。夫

達が連れ出されてしまった後、日本兵達が、原告カランザを銃剣で取り囲み、キャプテン・オオタグロともう一人の日本兵が同原告を強姦した。強姦の間、子供達はその場において泣いていたが、フィリピン人通訳が、子供達に泣くな、泣くと殺されるぞ、と脅していた。この時には、原告カランザは逃げだそうと抵抗したが、日本兵が銃剣の峰か柄の部分で同原告の後頭部を強く殴ってきた。原告カランザはしばらく気絶したが、気がつくと殴られたところの傷口があいて血が出ていた。その時の傷で今でも頭頂部が少しへこんで残っている。その夜、夫と息子が帰ってきてから、原告カランザが強姦されるのを見ていた子供が、同原告が強姦されたことを父親に話してしまった。夫はそのことを聞いて怒ったが、日本兵をとても恐れていたものでどうすることもできなかった。

翌日から、日本兵は、原告カランザ達の家を駐屯地にして、いくつかのグル

プに分かれてゲリラ掃討のために朝出ていき、夕方に帰ってきた。その翌日の夜は、キャプテン・オオタグロの帰りが遅くなったようで、他の日本兵が原告カランザを押さえつけて順番に同原告を強姦した。はじめのうちは原告カランザは抵抗してもみ合いになり、同原告の肩の骨が折れた。

原告カランザは、毎日、日本兵の洗濯や料理をさせられ、さらに週に一度位、五名から六名位の日本兵に強姦され続けた。原告カランザが強姦されるのは、いつも同原告達の家の中だった。原告カランザは、敷地内にたくさんの日本兵がいつもいるし、捕まったときのことを考えると恐くて子どもを連れて逃げ出すことなどはできなかった。

日本兵は、長い間、原告カランザ達の家に駐屯し続けていた。日本兵は時々、近くの洞穴に移動することがあったが、その時には原告カランザが洗濯や料理

のために連れて行かれた。そこで二度程強姦を受けたこともあった。

その後、一九四四年一〇月二八日、近くに米軍が来て爆撃も始まったため、日本軍は原告カランザ達の家を火をつけ、兵士達は周囲に掘っていたトンネルを伝って逃げていった。日本兵が逃げた後、原告カランザ達家族も近くの小川にある隠れ家に一時隠れて、その後小川づたいに逃げた。

日本軍の兵士に性的な暴行を受けたうえ、原告カランザの頭頂部の一部は今もやわらかくへこんでいて、その後、意識障害や頭痛、めまいなどを引き起こした。原告カランザは、このような強姦等の行為をした日本兵達に対しては、今でも強い怒りを持っている。

一三三 原告 カニエード

原告 XXXXXXXXXX カニエード（以下「原告カニエード」という。）は一九一七

年一月一日ルソン島西部のパンガシナン州バヤンバンで生まれた。

原告カニエードは、その後マニラへ移り、一九四二年一月、二四歳のとき婚姻したが、一九四三年頃、夫は日本軍に脇の下を刺され、殺された。夫を埋葬した三日後の午後、原告カニエードが夕食を作っていると銃で武装した四人の日本兵が屋内へ侵入し、同原告を街角に止めてあつた車に乗せてアルチ・ロサーダ・ストリートの駐屯所である大きな二階建建物へ連行した。原告カニエードは車から降ろされ、奥の食堂へ連れ込まれた。原告カニエードは腕を掴んでいた兵士によって食堂へ引きずり込まれるや、すぐにコンクリートの床の上に押し倒された。下着をはぎ取られたが、抵抗すると殺されると聞いていた原告カニエードは、恐怖から抵抗できず、ただ泣き続けていた。最初に強姦した兵士は丸顔で鼻が低かった。原告カニエードは恐怖感から逃げることなど思いも

つかず、何も考えられず、目を閉じて耐えていた。

原告カニエードはその後三週間、毎夜一人ないし三人の日本兵に強姦された。一週間たった頃、逃げようと試みたが、ドアのところで兵士に捕まり、果たせなかった。その頃原告カニエードの性器は痛み、子宮が腫れた感じとなった。ある兵士は立腹して原告カニエードの顔を銃剣で刺した。出血したが、放置された。原告カニエードと同様捕らえられていた他の女性がタバコの灰を集めて止血してくれた。食事は朝と昼の二回与えられたが、原告カニエードは他の女性に頼んで持ってきて貰い、水だけ飲んでいた。原告カニエードの体力は、弱っていき、四週間目からは、出血が続き、歩行困難に陥った。約一か月監禁されている間検診も予防もなく、金員も与えられなかった。原告カニエードはマツトもないところで終日横になり、やっと這って歩くという状況に陥った。肉

のかたまりのようになり、役に立たなくなった原告カニエードを日本兵は街角で釈放した。

原告カニエードは、釈放時には性器が痛み、ほとんど歩けなかった。義父が原告カニエードを助け、現在のフィリピン総合病院へ連れて行った。原告カニエードは医師から子宮が腫れていると言われ、膣も裂けて出血しており、縫合しなければならなかった。原告カニエードの左額の髪の毛の生え際には現在も二センチメートル程の銃剣で刺された傷跡がある。

二四 原告
[redacted] カンポ

原告 [redacted] カンポ（以下「原告カンポ」という。）は、一九二四年五月三〇日、ミンダナオ島ダバオの沖にある小さな島サマル島のカプテアンで生まれた。

一九四二年に日本軍がダバオ市にやってきて、翌一九四三年四月頃、原告カンポ達の住むサマール島にも約二〇人の日本兵がやってきた。原告カンポが被害にあったのは、日本軍が島にやってきて間もない頃のことだった。両親は農地に出ている、原告カンポ一人が家で料理をしていたとき、駐屯部隊の隊長だったキムラ大尉が兵士一人を連れて、いきなり同原告の家に入ってきた。キムラ大尉は原告カンポを押し倒し、服を脱がすと、同原告を強姦した。

一週間後、またキムラ大尉が兵士を一人連れてやって来た。その時も両親は家におらず、原告カンポと弟だけだった。キムラ大尉は原告カンポの家の中で、弟が見ているのもかまわず、同原告を強姦した。

キムラ大尉はそれから四、五日後にもやってきて、原告カンポを強姦した。さらに一週間位経った頃、キムラ大尉は今度は五人位の兵士を連れて原告カ

ンポの家にやってきた。キムラ大尉は原告カンポの両親に向かって「連れて行く時が来た。」と言い、同原告の喉元に銃剣を突きつけた。両親は抵抗したら原告カンポや家族が殺されてしまうと思ひ、何もできなかった。

原告カンポは両手を前に縛られて兵舎まで連行され、兵舎一階の小さな部屋に押し込められた。部屋には外から鍵がかけられた。原告カンポはそこに約二か月にわたって監禁された。

キムラ大尉は好きなきだけやって来て、原告カンポを強姦した。原告カンポが悲しくて泣いていると、キムラ大尉はひどく同原告を殴った。キムラ大尉に強姦される以外に、原告カンポは裁縫をするように指示された。毎日部屋の中で縫い物をさせられた。食事は部屋のドアについている小さな穴から一日二三回、ナスや米、魚等を二皿の食器に入れたものを出された。トイレは、部屋

の中のベルをならして合図をすると、日本兵が来て、原告カンポをトイレに連れて行った。その間もずっと監視された状態だった。

一九四三年七月のある夜、キムラ大尉をはじめとする日本兵達は見張り一人を残して皆出かけていった。この絶好の機会に、三人のゲリラが駐屯地にやってきて、原告カンポを部屋から救出してくれた。原告カンポがゲリラに救出されたことを知った日本軍は、同原告の家はもちろん、近隣の家までも焼き討ちにした。幸いなことに近隣の人々はそれぞれ事前に山の方に避難していた。原告カンポ達は一九四四年まで山で避難生活を続けた。食料が乏しく、苦しい毎日だった。その後、米軍がやってきたという知らせを聞いて村に戻り、家を建て直してそこで生活を始めた。

原告カンポは戦争後、島を離れてダバオに働きに出た。島ではキムラ大尉に

されたことを皆に知られているようで、恥ずかしかったためだった。原告カンはポはダバオ・ジェネラル・ホスピタルに住み込みで働いた。病院には負傷した日本兵が多く入院していたが、原告カンは自分が日本兵にされたことを思い出し、毒薬を飲ませて殺してやろうと何度も思ったが実行することはできなかつた。

二五 原告 ■■■■■ ブスタマンテ

原告 ■■■■■ ブスタマンテ（以下「原告ブスタマンテ」という。）は、一九二六年二月一八日、マニラのマラテ地区シンガロンで生まれた。

一九四三年一〇月頃、原告ブスタマンテがバタアン州ヘルモサ町へ通ずる国道を歩いていたとき、日本軍のトラックが急に前で停車し、日本兵が降りてきて同原告を無理矢理荷台へ連れ込み、近くの日本軍の駐屯地に連れ込んだ。

原告ブスタマンテは、日本軍の駐屯地にあるニツパハウスの一室に連れ込まれ、その部屋で日本兵三名に代わる代わる強姦された。原告ブスタマンテは強姦された後、少しの間、気を失っており、立ち上がれなかった。原告ブスタマンテは、当時初潮はあったが、強姦されるまで性体験はなかった。原告ブスタマンテは、最初の強姦を受けたとき性器から出血し、出血のために服にも床にも血がついていた。また暴行のため足のつけ根や抑えつけられた肩と腕等が大変痛んだ。強姦のショックと痛みでその夜は寝ることができなかった。

原告ブスタマンテは、ニツパハウスに監禁され、一年以上の間、日本兵から強姦され続けた。三日目以降は、午前中にマカピリから命じられニツパハウス内の一階の洗濯場で、棒状の石鹸二個とタライを与えられ、日本兵の軍服等の洗濯をさせられた。その間、駐屯所にいた何人かのマカピリに監視されていた。

た。このほか、駐屯所にいたマカピリの食事等も作らされた。そして、夜になると、原告ブスタマンテ達は、生理の時を除いて毎夜午後八時頃から三人ないしは五人の日本兵から強姦され、午前一時頃まで眠れないこともあった。ハウス内では常に日本兵と駐屯所にいた約一〇名程のマカピリに監視されていた。

一九四四年一二月頃、アメリカ軍の航空機が駐屯所の上空を旋回し、駐屯所がパニックに陥った際、マカピリが、監禁されていた原告ブスタマンテ達を国道まで連れて行き、解放してくれた。原告ブスタマンテは、父にも日本軍にされた行為については話さなかった。家族の名誉が傷つけられると思い、また、父が大変悲しむと思ったためだった。母には真実を告白したが、母は大変悲しみ、耐えるように言った。

原告ブスタマンテは、一九四七年に結婚し、三人の子供を設けたが、常に日

本軍に強姦されたことを思い出し、夫との性関係はうまくいかなかった。原告
ブスタマンテは、自分の経験を、五〇年以上も自分の胸に秘め、未だに家族に
は話していない。また、日本軍の駐屯所から解放された後ずっと悪夢に悩まさ
れ続けてきた。被害の体験を思い出すと未だに恐怖感が消えない。原告ブスタ
マンテは、今も強姦の際に日本兵に強く抵抗したときに、日本兵から殴られ、
平手打ちされたことを思い出す。これまで、戦争時代に性的奴隷にされたこと
が原因で、常に自分の殻にとじこもり、他人には打ち解けることがなかった。

一六 原告


ランサローテ

原告

ランサローテ（以下「原告ランサローテ」という。）は、

一九二五年八月七日、パナイ島にあるイロイロ州バタド町で生まれた。

一九四二年一〇月頃に日本軍がエスタンシア町にやってきた。ある朝原告ラ



ンサローテは、バタド町の自宅からエスタンシア町の中心にある市場へ買い物に行こうとした際、武装した日本兵の一隊に捕まり、同町内の駐屯所に連行され、三つに仕切られていた部屋の一つに入れられて鍵をかけられた。

原告ランサローテが最初に強姦されたのは連行された日だった。一人の日本兵がやってきて、持っていた銃で原告ランサローテを脅し、強姦した。その晩さらに他の日本兵から強姦された。次の日の朝気がつくとかかなり出血していた。この日も合計四人の日本兵が強姦にきた。その後は大体毎日四人から五人に強姦された。

原告ランサローテは毎朝食事を作らされ、掃除もさせられた。この駐屯地には、門に三人の歩哨が立っていた。そのほかに自分が食事を作らされる時に見張りが一人ついた。また駐屯地で水浴びをしたときにも見張りがついた。原告

ランサローテの閉じ込められていた部屋は、家具らしいものもなく、下は地面の上に竹を敷いてあり、ゴザを敷いて寝ていた。部屋には鍵がついており見張りがいた。

一九四三年か四四年、エスタンシア町にアメリカ軍が来て、駐屯所を砲撃した際、原告ランサローテは逃げる事ができた。

原告ランサローテはこの強姦の影響で、胸等が今でも痛む。検査によると右の肩の骨が盛り上がっているということだが、日本兵に強く押されて床にうちつけられたことや胸を強く押さえられたことが原因だと思われる。

一七 原告

ヴァレンシア

原告

ヴァレンシア（以下「原告ヴァレンシア」という。）は、

一九二〇年二月九日、ネグロス島の西ネグロス州バコロド市に生まれた。

原告ヴァレンシアが日本軍に連行されたのは、一九四二年か一九四三年のことだった。そのとき原告ヴァレンシアは、マニラのパコ市場に用事があって行く途中だったが、市場の手前で日本兵が同原告を捕まえ、市場のそばの小屋の中に同原告を連れ込んだ。そこで原告ヴァレンシアは、二人の日本兵から銃剣で脅されるなか、もう一人の日本兵から強姦された。原告ヴァレンシアは、恐怖のあまり抵抗することもできなかったが、思わず「けだもの」と叫んだところ、頬を殴られてしまった。

その後、原告ヴァレンシアは、トラックに乗せられて、マニラ市内のマカティ空港（当時あった空港）の近くの日本兵が大勢いる所に連れて行かれ、トン屋根と黒いテント布のようなものでできた一階建の大きな小屋に監禁された。それでも原告ヴァレンシアは強姦され、毎夜一五人位、さらに昼間も日本

兵の相手をさせられた。原告ヴァレンシアは逃げたくてたまらなかったが、小屋の前には常に見張りがおり、その地区には大勢の日本兵がいて、二重の鉄条網で囲まれていたので、そこから逃げ出すことはできなかった。

このような生活が八か月か九か月位も続いた後、原告ヴァレンシアは、トラックに乗るように命じられ、今度はダコタ地区の大きな家に移された。ここでも、原告ヴァレンシア達は監視されており、食事のときに一階に降りていくと、ピストルを持った日本人の民間人男性と、制服を来て長い銃を持った日本人男性がいつも見張っており、夜間は入れられていた部屋に外から鍵がかけられた。監視をしていた日本人の男性からは、お辞儀の仕方が悪いと言ってはよく殴られ、原告ヴァレンシアは逃げようと思えば殺されると思って、逃げることはできなかった。そこで原告ヴァレンシアは、毎日のように、昼間は少なくとも五、



六人位、夜は数えられない次から次へと日本兵の性行為の相手をさせられた。原告ヴァレンシアは性行為が嫌でたまらず、何度も日本兵の相手をすることを拒もうとしたが、兵士に「バカヤロウ」と言われて殴られるだけだった。それでも原告ヴァレンシアは拒否して、日本兵から殺されかけたこともあった。怒った日本兵が銃剣で原告ヴァレンシアを刺そうとしたのだった。原告ヴァレンシアは危ういところで逃げ、右足のすねを刺されただけで済んだが、今もその傷跡は残っている。そのとき、原告ヴァレンシアは「殺される。」という恐怖でいっぱいだった。

一九四四年にアメリカ軍の爆撃が始まると、監視の日本人は皆いなくなり、原告ヴァレンシア達はやっと解放された。

右のとおり、原告ヴァレンシアは、一年以上にわたって日本軍に監禁され、

日本兵に強姦され続け、戦後もこのことを夫にも打ち明けられずに生きてきた。原告ヴァレンシアの妹は、日本軍に殺されたし、妹の夫も、日本軍に強制労働のために連れ去られ、そのまま帰ってこなかった。原告ヴァレンシアは強姦した日本兵や、妹を殺した日本兵を跪かせて許しを乞わせてやりたい、苦しんで死ねばいいとずっと思ってきた。また、今でも日本人を見ると恐怖を感じるこ
とがある。

二八 原告

ノブレーザ

原告、
ノブレーザ（以下「原告ノブレーザ」という。）

は、一九二〇年八月二日、パナイ島ア克蘭州マダラッグ町で生まれた。

一九四三年三月一八日頃、原告ノブレーザが家の周りの草を刈ったり小さな木々の枝を切るなどしていると、急に二人の日本兵が近くに来て同原告を捕ま

え、日本軍の駐屯地になっているマダラック・カトリック教会に連れて行った。教会の入口には銃を持った数人の日本兵が見張っていた。

この日の夜、日本兵は次々に原告ノブレーザを強姦し、結局この夜は翌朝まで強姦され続け、合計六人の日本兵から強姦された。

原告ノブレーザは、この教会に約二週間監禁され続けた。そして、連日数人の日本兵から強姦され続けた。毎日夜になると二人から四人の日本兵が同原告のベッドに来て強姦したのである。

原告ノブレーザが監禁され始めてから約二週間後、日本兵は突然全員が駐屯していたマダラックの教会から姿を消してしまった。このため、原告ノブレーザは、逃げ帰ることができた。

原告ノブレーザは、日本兵に監禁され強姦され続けたことを今まで忘れられ

ず辛い人生を歩んできた。原告ノブレーザは、この恐ろしい体験を死ぬまで忘れられないだろうと強く感じている。

二九 原告

フマピット

原告

フマピット（以下「原告フマピット」という。）は、一

九二五年一月一七日、セブ島南部のボルホーンのグラナダ村で生まれた。

一九四四年三月に日本軍はグラナダ村にやってきた。日本兵は次々にみつけた住民を教会や学校に連れて行った。この日本兵がやってきたその日の朝一〇時頃、原告フマピットは買い物をするために通りに出たところを三人の日本兵に捕まった。日本兵は、原告フマピットを町の教会のある南の方に引きずっていったが、途中で通りの少しはずれたところにある草むらに同原告を連れ込んだ。原告フマピットは抵抗をしたが、日本兵は、同原告の胸や脇腹を殴り太股

のあたりを蹴ったりした上、同原告を強姦した。原告フマピットは疲れて気を失った。原告フマピットが意識を回復すると日本兵は同原告を教会に連れて行った。

教会に着くと、日本兵は、原告フマピットや同原告の従兄弟二名等若い女性をトラックに乗せ、マクタン島のラプラブ市にある建設中の滑走路のそばにあったバンクハウスという労働者用の仮設住宅に連れて行った。原告フマピット達は、ここでフィリピン人労働者の一日三回の食事の用意をし、また掃除をした。原告フマピット達の建物には日本兵の見張りがついており、自由に出入りすることはできなかった。また食事を作ったり、配ったりする時にも日本兵の見張りがついていた。

この建物に拘束されてから二、三か月程したある日の夜九時頃、日本兵が原

告フマピット達の建物に入ってきた。そしてその建物の中で女性はみな日本兵に強姦された。原告フマピット達は抵抗したがどうしようもなかった。原告フマピットは五人位に強姦された。それから数か月の間、毎晩午後九時頃から約三時間日本兵がやってきて原告フマピット達を強姦した。一度に日本兵は三、四人、多いときは五人位の相手をさせられた。

一九四四年八月頃、米軍がくるという噂が流れ、日本軍は浮足立ち、ある日見張りの兵士もいなくなったことから、原告フマピット達はやっと建物を抜け出すことができた。

原告フマピットは、右の集団強姦の直後頃からしろいおりものがでるなどの体の変調があり、一九五〇年に医者の治療をうけた。原告フマピットは戦争中の出来事を家族には話をしていないが、人に言えないような名誉を傷つけられ

たことで心に深い傷となって残っている。忘れ去ろうと努力をしても、それでも当時のことが思い出される。

三〇 原告
シメオン

原告
シメオン（以下「原告シメオン」という。）は、一九三二年頃の二月二〇日、パナイ島アクラン州バタン地区ルピット村で生まれた。

一九四二年、日本軍がパナイ島に上陸した。このためルピット村の住民は避難を始めた。一九四四年の十一月頃、原告シメオンは、ルピット村の海辺の避難小屋から離れた場所で母親を捜していたとき、突然一〇人位の日本兵に遭遇した。すると、一人の日本兵が原告シメオンを強引に引っ張ってトラックに乗せた。原告シメオンを含む四人の女性が、バタンからバレーテという町にある

川沿いの大きな家に連れて行かれた。その大きな家は、日本軍が駐屯地として使用していた。家の周りには大勢の日本兵がいた。

その夜、一人の日本兵が原告シメオンの部屋に入ってきた。この日本兵は、強姦しようとして同原告を強く押し倒した。このため同原告は、竹で作られたベットに右腰を強く打ち付け気絶した。原告シメオンは、その後何が起きたのか正確には記憶していない。同原告は、日本兵から水を掛けられ意識を取り戻したのである。その時、原告シメオンは、自分の性器から出血し、衣服や床に血が付いていることに気づき、右腰の周囲や性器等に激痛を感じた。日本兵に強姦された時、原告シメオンは、初潮前で性経験がなく男性について何も知らない幼い少女だった。

翌日も午後二時頃、日本兵が原告シメオンを強姦した。同原告は、体がかな

り衰弱しておりこの時抵抗できる状態でなかった。この日の夜、夕食が終わり三時間位すると一人の日本兵がさらに部屋に入り、原告シメオンを強姦した。

三日目の午前中、三人の日本兵が原告シメオンの部屋に来た。そして、次々に同原告を強姦した。夜になるとさらにもう一人の日本兵がやってきて同原告を強姦した。原告シメオンは約三週間同じ部屋に監禁され、毎晩日本兵に強姦された。同原告は、昼間強姦されたこともある。

同原告は、最初の日、日本兵から右腰を強く打つ暴行を受け、右足を負傷した。この時の負傷で現在でも右足が痛く、後遺症が残っている。

三週間程経過したある日、原告シメオンは、部屋の外のトイレに行った際、見張りの日本兵の目を盗んで逃げ出した。

原告 ■■■ マフエロ（以下「原告マフエロ」という。）は、一九一八年五月一八日、サマール島のパンブヤン市で生まれ、その後、母と一緒にマニラ市シンガロンに住んでいた。

一九四三年夏のある日の午後遅く、軍服を着た日本兵五人が原告マフエロ達の家に突然押しかけてきた。その時、家には男性が四人、女性が原告マフエロと母を含めて五人、それに子ども達五人がいたが、日本兵は、抵抗する男達を軍刀で脅し、殴る、蹴るなどの暴力をふるって、四人の男達を連行していった。それから二時間程経った頃、原告マフエロ達が途方に暮れていると、また日本兵達が同原告達の家にやってきた。日本兵は原告マフエロ達に襲いかかり、同原告は自分の部屋で日本兵に床に押し倒され、強姦された。原告マフエロは、数時間前に起こった、男達が連行されていった時の日本兵の暴力を思い出し、

殺されるのではないかと恐怖でいっぱい、何も抵抗はできなかつた。

それから日本兵達は、毎晩のように原告マフエロ達の家にやってきて、同原告達を強姦するようになった。日本兵は少ない時で五人、多いときには一〇人位でやってきて、原告マフエロは一晚で二、三人の兵士から強姦された。

半月程して、ようやく原告マフエロ達は避難先を見つけることができ、マニラ市ビト・クルーズに皆で引越した。しかし、二、三か月経った頃、原告マフエロ達の家のすぐ隣に日本軍の駐屯地が置かれることになり、日本兵達は駐屯地が設置された日から、同原告達の家にやってきたり、同原告達を軍のテントや接收された家に連れ込んで、昼夜を問わずに強姦した。原告マフエロは男達を連行した時の日本軍の恐ろしさを思い出し、何も抵抗することができず、なすがままにされていた。多いときで一日五人もの日本兵から強姦された。原

告マフエロは、このように昼夜を問わず強姦されたうえ、日本兵の衣服の洗濯等を命じられた。原告マフエロ達にとって、ここでの生活は日本軍の性奴隷そのものだったが、家の周りに四六時中日本兵がおり、ずっと監視されているような状態だったので、とても逃げることはできなかつた。

このような状態は約三か月続いた。その間数え切れないくらい強姦されたせいか、原告マフエロは子宮に痛みを感じるようになった。

その後一九四四年になって、突然日本軍がこの駐屯地を撤収して移動したため、原告マフエロ達はようやくこの性奴隷状態から解放された。

三三一 原告

ロレンソ

原告

ロレンソ（以下「原告ロレンソ」という。）は、

一九一四年二月二四日、マニラ市トンド地区ファビア通りで生まれた。原告

ロレンソは、一九三八年に結婚し、マニラ市サンタメサで暮らし始めたが、一九四〇年にミンダナオ島コタバト州ダジャンガス地区（現在のジェネラル・サントス市）ラガウに移住し、一九四三、四年頃日本軍の侵攻によりラガウからマルベルの中の山間部のバリオ・クアトロに移り住んだ。

原告ロレンソが山間部に避難して一か月も経たないある日の午後、同原告が夕食の用意をしていると、突然三人の日本兵が次々に同原告の前に現れた。原告ロレンソは抵抗したが、日本兵に縄で手を縛られ、日本軍が駐屯地として使用していたマルベルの事務所の建物の一階の真中の部屋に連行された。原告ロレンソは、その部屋に一週間監禁された。最初の日の夜、原告ロレンソを連行した三人の日本兵のうちの一人である将校は、同原告の手足を縛った。原告ロレンソは激しく抵抗したが、その将校らしい日本兵は、同原告の腰を強く蹴っ

た。このため、原告ロレンソの腰は赤く腫れ上がり、あざができた。この夜、原告ロレンソはその将校に強姦された。

原告ロレンソは、二日目と三日目の夜にも、同原告を連行した他の日本兵から強姦された。

一週間が経ち、アメリカ軍が来るとの情報伝わり、日本軍は駐屯地を放棄し、いなくなった。原告ロレンソは、フィリピン人のゲリラにより監禁されていたその部屋から救出された。その後、原告ロレンソは診療所に連れて行かれ、怪我をした腰等の治療を受けた。原告ロレンソがその診療所に入院して約一か月後、夫が同原告を連れに来た。原告ロレンソは、夫に日本軍に監禁され強姦されたことを話した。原告ロレンソの夫は、「恥ずべき事件」だと考えたのか、同原告に対する態度が事件の前と変わり、冷たくなった。

原告ロレンソは、日本兵から大変名誉を傷つけられる経験をし、心の中に何時までも傷が残った。原告ロレンソは、今でも、自分を強姦した日本兵に激しい憤りを感じ、憎しみさえ持ち続けている。

三三三 原告 [REDACTED] オファルサ

原告 [REDACTED] オファルサ（以下「原告オファルサ」という。）は、一九三〇年一月二七日、ルソン島南部ビコール地方のソルソゴン州グバで生まれた。

一九四三年の初め、一、二月頃、原告オファルサが長兄と家で二人でいたとき、日本兵がマカビリと一緒に突然やってきて、同原告らを連行しようとした。原告オファルサは、その時抵抗したが暴行を受け、日本兵によって駐屯地に連れていたグバの元町役場庁舎内の監獄に連行され、監獄内で最初五人の兵士に

強姦された。当時、原告オファルサは二三歳でまだ生理もなく性経験もなかった。性行為の意味もよく分からなかった。それからは畳二畳分位の広さの監獄の中で、週四回夜八時から一〇時頃まで、一日五人位の日本兵に強姦された。駐屯地には日本兵が五〇人位おり、原告オファルサと同様な状況におかれた若い女性達が二〇人位いた。しかし、監獄の各部屋には鍵がかけられて交替で見張りがつき、洗濯の時以外は外に出ることは許されず、監獄内にじっと座っていることを強要され、これら女性同士の話も禁じられていた。

一か月位たった一九四四年一月頃、米軍がまもなく上陸するとの噂が広まり、日本兵は混乱し、規律が乱れていた。ある日、初めて監獄の鍵がかかっている状態を見つけた原告オファルサは脱出を決意し、夜一〇時頃、駐屯地の裏口から逃げた。

三四 原告 ■■■■■ ハンポリーナ

原告 ■■■■■ ハンポリーナ（以下「原告ハンポリーナ」という。）は、

一九三三年六月三日、ソルソゴン州グバット町のフペ村で生まれた。

一九四一年一二月頃、日本軍がマニラに侵攻し、一九四三年か四四年頃、村に日本兵が来るようになった。一九四四年二月頃の早朝三時頃、原告ハンポリーナの家に五人の日本兵がやって来た。そのとき家には原告ハンポリーナと母の二人だけだった。日本兵の一人が、原告ハンポリーナを母から引き離して無理矢理連れて行こうとした。原告ハンポリーナは恐ろしさのあまり抵抗することもできず、家の戸口のところで引っ張られるようにして連れて行かれた。母も、銃剣をもった日本兵の前で、恐怖感でいっぱいでも抵抗できず、その場に置き去りにされた。そして、原告ハンポリーナは日本兵に指示されるまま

に歩き、学校に連れて行かれた。そしてその後、小学校の校庭からグバットの町役場に連れて行かれた。町役場が日本軍の駐屯地になっており、原告ハンポリーナは正面玄関から入って右側にある二〇平方メートル位の大きな部屋の中に入れられた。施錠はされていなかったが、部屋の入り口に見張りがいたので、逃げることはできなかった。

原告ハンポリーナは夜になって別の部屋に連れて行かれ、その部屋で二人の日本兵に強姦された。当時原告ハンポリーナはまだ生理も始まっていなかった。強姦されたとき性器から出血し、ひどく痛んだ。また、床が堅く、日本兵から強い力で押さえつけられたので、強姦の最中体が痛くてどうしようもなかった。強姦が終わると日本兵達は出ていき、原告ハンポリーナはその部屋に残された。原告ハンポリーナは自分で最初に入った部屋に戻ろうとしたが、体が痛くて歩

くことができず、這って行った。

翌日の夜も原告ハンポリーナは三人位の日本兵に強姦された。強姦の時にはやはり別の部屋に連れて行かれた。原告ハンポリーナはそれから毎日、だいたいい二、三人の日本兵に強姦された。部屋の外には武器を持った兵士が監視しており、原告ハンポリーナ達は洗濯や掃除等必要な時に呼ばれるだけで、それ以外に出ることは許されなかった。

監禁され強姦されるようになって一か月半位経った一九四四年四月頃のある日、原告ハンポリーナは見張りの兵士の隙をついて逃げ出した。その後、原告ハンポリーナは一四歳の時にマニラに移った。日本軍の性奴隷にされたことが村で噂になっていたため、それが辛くて村を出たのである。

原告ハンポリーナは、一番最初に強姦されたときのことは一生忘れることが

できない。堅い床の上で強姦され続けた影響か、今でも背中が痛む。原告ハンポリーナは、夫には結局自分の辛い経験を話すことができなかった。

三五 原告 [redacted] ヘディア

原告 [redacted] ヘディア（以下「原告ヘディア」という。）は、一九三〇年二月二〇日、ルソン島東南部ビコール地方のソルソゴン州グバット町の balan-gai・ブラカオ（ブラカオ村）で生まれた。

原告ヘディアが日本軍に連行されたのは一九四四年四月頃のことだった。まだ一四歳の時だった。ある日の午前一〇時頃、原告ヘディアは、川に水を汲みに行った際、日本兵に捕まった。原告ヘディアは、日本兵三人によって、トラックに乗せられ、ブーラン町の北の方にある飛行場から少し入った所のトンネル（穴の掘ってある所）の中まで連れて行かれた。原告ヘディアが入れられた

のは三枚のテント地の布で三つに仕切られた部分の一つであり、その場所はトンネルの出入口に一番近いところで、出入口までは一メートル半位あった。そこには敷物のほかに空気の入った枕があった。原告ヘディアは何とかして逃げ出したかったが、入口には見張りがあり、トンネルの周りにも日本兵がたくさんいるので、とても無理だった。

夜になってから、三人の日本兵が原告ヘディアのところに来た。まず最初の日本兵が原告ヘディアを強姦しようとした。原告ヘディアが抵抗しようとする、その日本兵は同原告の両方の太股を手拳で一回ずつ思い切り殴った。それから原告ヘディアを強姦した。そして、別の二人が、順番を待つようにして、次々と原告ヘディアを強姦した。原告ヘディアはそれまで性的な経験は全くなく、当時まだ初潮さえ迎えていなかった。恐怖と苦痛とで悲鳴をあげ、泣き叫

んだが、日本兵は構わずに原告へディアを強姦した。原告へディアは、体中に痛みがあり、特に性器から出血があつて痛みがひどい状態だったので、その日は眠ることができなかつた。

それから原告へディアはトンネルの中のテント地で仕切られた部分に監禁され、毎日日本兵に強姦されることとなつた。だいたい一日に二、三人の日本兵が来て、原告へディアを強姦した。昼間に来る日本兵もいたが、大体は夜だつた。

原告へディアらは、日本兵に毎日強姦された以外には、そのトンネルの仕切の中にいるか、外に出て洗濯をしたり、薪取りに行くという生活をしていた。洗濯等の際には、必ず見張りの日本兵がついた。このような生活は約六か月続いた。最初の三か月は強姦にやってくる日本兵も多くて辛かつたが、その後は

少し少なくなつた。原告ヘディアは性奴隷としての生活を送る中で体調をくずし、頭が割れそうなほどの頭痛に悩まされた。また、ずっと体がだるく、胃の調子がおかしくなつた。腰も痛くなつた。

原告ヘディアらが解放されたのは、一九四四年一〇月のことだつた。ある日、アメリカ兵がトンネルにやつてきて、原告ヘディア達を救出した。

原告ヘディアは解放された後も頭痛や腰の痛み、胃の調子の悪い状態等に苦しんだ。そのための民間療法を約一か月受けた。また、精神的にもまいつており、時々辛い経験を思い出して気分がひどく悪くなつた。同じ年代の娘達と会つたりするのが非常に恥ずかしく、見舞いに来てくれた人にも会うことができなかつた。

原告 [REDACTED] アヤオ（以下「原告アヤオ」という。）は一九一四年五月五日ボホール島のボホール州タグビラランのダンプス地区で生まれた。原告アヤオは二〇歳の時に結婚し、子どもを三人生んだ。

日本軍がボホール島に上陸した時、原告アヤオの住むダンプスにも日本軍がやってきて、フィリピン国軍の基地を駐屯地にした。原告アヤオ達は危険を感じ、バクライオン町のカンギニグ村に避難した。

一九四四年の一〇月頃のある日、原告アヤオは駐屯地に野菜を売りにいこうとしたとき、日本軍の軍人に駐屯地の中の建物に連れて行かれた。この建物は木造で屋根がニッパで葺いてある二階建て、一階に二室ついており、原告アヤオは一階の部屋に連れ込まれた。この部屋の中で、日本の将校から銃をつきつけられた。怖くなって泣いたが叫び声をあげることができなかった。原告アヤ

オはベッドに押し倒されて、そこで服を脱がされた。レイプをされている間中拳銃をつきつけられた。原告アヤオはそれでももがいて抵抗したが、どうにもならなかった。原告アヤオはその日四回強姦された。そして翌日の夜も同じ将校に強姦された。三日目は将校は部屋に帰ってこず四日目の午後帰ってきたが強姦はされなかった。五日目夕方にまた将校から強姦された。そのあとでその将校は身振りて原告アヤオに出ていくように言った。それでようやく原告アヤオは外に出ることができた。この間、原告アヤオは三人の子供が心配で、一日も早くもどりたかったが、外には日本兵の見張りもついており、到底逃げさせる状態ではなかった。

原告アヤオは、駐屯地を出ることができるとすぐ、カンギニングに戻った。間もなく原告アヤオは妊娠したことがわかった。しかしこの妊娠した子の父親

になる日本の軍人に連絡をとろうとしたことはない。それはフィリピンの兵士に知られるのが怖かったからだった。日本人の協力者とみられたら命があぶないというのが当時の状況だった。またカソリック教徒として中絶等到底することもできなかった。そして一九四五年七月一六日にアルフレッドが生まれた。原告アヤオは男性が怖く、二度と妊娠しなくなかったので、戦後再婚を考えたこともなかった。近所の人達は原告アヤオが日本の軍人に監禁され、強姦されたことを知っていた。そのため原告アヤオはずっと陰口をたたかれてきた。原告アヤオだけではなく、アルフレッドは日本人の子供ということでもよくいじめられていた。

三七 原告

フェリシダリオ・

原告

フェリシダリオ・

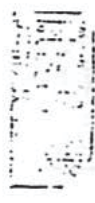
(以下「原告フェリシダリオ」)

という。シは、一九二八年七月二六日、ルソン島東南部ビコール地方のソルソ
ゴン州グバット町コタナダコ村で生まれた。

グバットの町に日本軍がやってきたのは一九四一年一二月頃のことだった。
そして、原告フェリシダリオが日本軍によって連行されたのは、一九四三年の
一〇月頃、米の収穫期が間近な時期だった。その日、原告フェリシダリオは、
母親に頼まれて、トレンタイ・ウノという隣村の店に洗濯用の石鹼を買いに行
って帰る途中であった。日本軍のトラック一台が走ってきて、乗っていた五人
の日本兵全員が、車から降りてアバカ製のロープで原告フェリシダリオを後ろ
手に縛り、トラックに乗せ、当時日本軍によって使われていたグバット町の町
役場の建物に連行した。建物の周りは日本兵に固められていたので、逃げるこ
とはできなかつた。原告フェリシダリオは、いくつかの小部屋のうちの一つに

押し込まれた。その際、原告フェリシダリオは一人の日本兵に銃底で後ろから突かれたので、小部屋の中の方に倒れた。立ち上がろうとすると、まず最初の日本兵が原告フェリシダリオを襲い強姦した。原告フェリシダリオは、銃底で突かれてひどく痛く、また日本兵から銃剣の先を突きつけられており、とても抵抗することはできなかつた。その後、五人の日本兵が、代わる代わる原告フェリシダリオを強姦した。堅いセメントの床の上で何の敷物もないところで強姦されたので、背中がひどく痛んだ。強姦は二時間続いた。五人が終わると日本兵は部屋の鍵をかけて出ていった。原告フェリシダリオは体中が痛み横になることができず、壁にもたれていた。その日の午後六時頃になって、また午前と同じ五人の日本兵がやってきて原告フェリシダリオを強姦した。

翌日の正午頃、部屋の中に昨日と同じあの五人の日本兵がやってきて原告フ



エリシダリオを強姦した。その日本兵達は夜にもやってきて、また強姦した。

原告フェリシダリオは、それから約三か月間、同じ小部屋に閉じ込められ、セメントの堅い床で強姦される状態も変わらず、毛布等を与えられることもなかった。その間、五人の日本兵は昼夜を問わず気が向いた時にやってきて、原告フェリシダリオを強姦した。原告フェリシダリオは被害を受けて出血するところがよくあった。出血していても拒むことはできず、抵抗するとひどく殴られた。原告フェリシダリオは部屋の掃除や軍服の洗濯、水汲みも命じられた。原告フェリシダリオは、この三か月間の生活ですっかり痩せてしまい、また強姦されたショックで深刻な精神的ダメージを受けていた。

ある夜、原告フェリシダリオは日本兵が強姦を終わって出ていくときに同原告の小部屋の施錠を忘れていったことに気がついたので、深夜ひそかに小部屋

を出て、建物を抜け出した。原告フェリシダリオは、家に戻ってから腰等体の痛みが続き、薬草治療を受けた。また、深刻な精神的ダメージを受けており、強姦されてしまった自分には幸せな結婚等の未来はないと絶望的な気持ちになり、自殺を試みたこともあった。しかし、母に「神様がいるから希望を持つように。」と諭され、思い止まった。腰の痛みは戦後もずっと続いている。

三八 原告 [REDACTED] ・ラメール

原告 [REDACTED] ラメール（以下「原告ラメール」という。）は、一九二六年一月二二日、ルソン島南部ラグーナ州ロスバニオスで生まれ、その後メトロマニラのパサイ市に引っ越した。

日本軍がマニラに来たのは一九四二年一月頃であり、原告ラメール達がブラカン州サンミゲル町マンデリに疎開したのは一九四四年頃で、原告ラメールが

一八歳の頃だった。

疎開した一九四四年の夏（四月か五月）のある日、原告ラメールは、昼食後、両親から頼まれて、マンデリから約三キロメートル離れたサンミゲルの街の中心まで買い物に行くことになった。その頃サンミゲルに日本兵が来ていた。原告ラメールは、途中で同年代の女性三人といっしょになったが、サンミゲルへの道半ば位で、突然、脇の草むらに潜んでいた日本兵一〇人位が、原告ラメールらの前に出てきた。日本兵は、原告ラメール達の服の胸ぐらや腕をつかんで、草むらに引きずり込んだ。原告ラメール達が逃げようと抵抗したところ、日本兵は同原告達の腹部を拳で殴り、同原告はその場で気を失ってしまった。原告ラメールが気がついた時、同原告は日本兵が大勢いる兵舎に連れ込まれようしているところだった。その兵舎は、三階建の民家で、原告ラメールは、半ば気

を失っている状態で、髪の毛を掴まれて、連れて来られた女性三人と一緒に兵舎の部屋の中に押し込まれた。原告ラメール達をその部屋に押し込めると、一〇名の日本兵は、すぐに同原告達に襲いかかり、同原告達が抵抗すると同原告達の膝や足を銃で叩き、歩けなくしてしまった。そして、原告ラメール達はそれぞれ一〇人の日本兵から順番に強姦された。原告ラメールは、とても弱っていて抵抗もできず、途中で気を失ってしまった。原告ラメール達が連れ込まれた部屋の入り口のドアは開けられたままだったが、そこから銃をかついだ日本兵が行き来しているのが見えたので、逃げ出すことはできなかつた。

翌日は、夕食の前頃に、日本兵が入ってきて、原告ラメール達四名を強姦していった。原告ラメール達が抵抗すると、平手で顔を殴られたり、腹部を拳で殴られたり、銃床で足を叩かれたりした。その後日本兵が夕食を持ってきたが、

原告ラメール達が抵抗して食べなかったので、そのことでまた日本兵から殴られ、また強姦された。三日目も同じように強姦され、それ以降も毎日、午後から夕方にかけて同じように日本兵が何度か来て原告ラメール達を強姦していった。

監禁されてから一週間位過ぎてから、日本兵が少なくなったのを見計らって、原告ラメールの母親が同原告を助け出してくれた。原告ラメールはその後医者にかかり二、三日入院した。原告ラメールは貧血状態だった。

一九四五年二月、原告ラメール達家族はマニラに戻ったが、同原告は、貧血や肺が弱っていたため数年間学校に戻ることはできなかった。原告ラメールは日本兵から辱められ、それ以降、相手の男性に自分の被害や処女でないことがわかってしまうのではないかという恐怖感があった。そのようなこともあって

原告ラメールが結婚したのは、一九七二年、四六歳の時だった。

三九 原告

ダヴィット

原告

ダヴィット（以下「原告ダヴィット」という。）は、一

九二七年一月七日、パンガシナン州ダソール町マグサイサイ村で生まれた。

一九四二年九月のある日、朝七時頃、原告ダヴィットは、当時一緒に住んでいた祖母とともにダソールの町に立つ市場に豆類等の野菜とバナナ等の果物を売りに出かけた。市場の前で祖母と別れ、原告ダヴィットは、役場に近い方の入口から市場の建物の中に入ろうとした。すると、町役場の前にいた多数の日本兵のうちの二人が原告ダヴィットを呼び止めた。原告ダヴィットは怖かったので、無視していると、日本兵は同原告に対し暴力を振るってきた。原告ダヴィットは、マカピリにアパカ麻の縄で後ろ手に縛られた。原告ダヴィットは大

声で叫んだり泣いたりして抵抗したが、その際、一人の日本兵が所持していたハンティングナイフを取り出し、同原告の右耳の耳たぶ部分を切り裂いてきた。耳たぶからは血が流れ、とても痛く、気を失うほどだった。そうした原告ダヴィットに対する日本兵の暴行をみていた祖母が助けようと近づいてきたが、同原告と同様に日本兵に捕まってしまった。

原告ダヴィットは、それから、町役場の前庭に連れて行かれ、やはり後ろ手に縛られている他の一五人程の男女のフィリピン人の列に入れられた。捕まった祖母もその列の中にいた。原告ダヴィットは、半日間も、炎天下の町役場の前庭に立たされた後、縄を解かれて、町役場の中に連れて行かれ、約一五人のフィリピン人とともに料理、洗濯、掃除をするように言われ、午後九時頃まで強制的に仕事をさせられた。それから、原告ダヴィットは、町役場の一階の部

屋に連れて行かれた。原告ダヴィットが部屋に入るとすぐに一人の日本兵が部屋に入ってきて、同原告を強姦した。さらに、後から後からと何人もの日本兵に強姦された。その日全部終わって気がついたら午前六時頃だった。

二日目も部屋に戻されるとすぐに強姦が始まった。毎日、何人もの日本兵に強姦された。原告ダヴィットは、一〇日間毎日日本軍が駐屯地とする町役場のなかで使役され、強姦され続けた。町役場の周りに多くのマシンガンが狙いをつけており、また、マカピリからは日本兵の言うことを聞かなければ首を切られるぞとか、逃げたら殺されるぞと脅かされていたので逃げる事ができなかつた。

原告ダヴィットは、町役場に入れられて一〇日程たったある日の朝、日本軍から祖母と一緒に家に帰ってもよいと言われた。そこで、原告ダヴィットは、



使役されていた祖母とともに町役場を出て家に向かった。しかし、日本軍は原告ダヴィット達をゲリラのスパイと疑っており、ゲリラ掃討のために同原告達をわざと逃がしていたため、同原告達が自宅に帰る道の後をたくさんの日本兵がつけてきた。そして、その日の昼頃、「パタウおばあさんの家」と皆が呼んでいる家の前に来たとき、その家の前にいた日本兵が、原告ダヴィット達に来るように叫んだので、同原告と祖母はその家に行った。その時、原告ダヴィットを追尾してきた日本軍もその家に入った。その家には、原告ダヴィット達と同じように日本軍にとらえられた女性が何人かいた。その夜また、原告ダヴィットは、複数の日本兵に強姦された。祖母も強姦されたらしく、「やめて」と叫んでいた。

翌日になって、一人のマカピリが原告ダヴィット達に対し、再び「家に帰っ

てもよい。」と言ったので、原告ダヴィット達は、自宅に向かったが、やはりたくさんの日本兵が後を追いかけてきた。丘の上にある自宅の階段の下に来たとき、自宅の窓からゲリラらしい男が原告ダヴィット達に対し、「止まれ」と叫んだ。そして、ゲリラは日本軍に発砲した。続いて日本軍も発砲を始めた。このとき、日本軍の発砲で祖母は撃ち殺されてしまった。原告ダヴィットは、祖母が目の前で日本軍により射殺されたのを見てショックのあまり一瞬立ちつくし、その後、痙攣している祖母を抱き抱えた。すると、二人の日本兵は、原告ダヴィットを祖母から無理やり引き離し、自宅より低いところにある稲が実っている田んぼの中に引きずって連れて行き、同原告を強姦した。原告ダヴィットは氣を失ってしまい、その後、這って逃げようとしたときに、父親に抱き抱えられて自宅に帰った。

原告ダヴィットは、自宅に帰ってから約一か月程は、性器に痒みがあった。また、排尿の時、腹部が痛くなるのは現在まで続いている。そして、戦争中強姦されるという出来事があったので、原告ダヴィットは、結婚する気持ちにはなれなかったが、その後約一〇年程たって、原告ダヴィットは結婚し、子供を生んだ。原告ダヴィットは、戦争中の出来事を思い出す度に悲痛な思いにかられ続けている。

四〇 原告 [REDACTED] レイエス

原告 [REDACTED] レイエス（以下「原告レイエス」という。）は、一九二八年一月二三日、マスパテ州マスバテ町で生まれた。原告レイエスは、一九四一年四月には、マスバテから約二八キロメートル離れたミラグロスという町に家族みんなで移り住み、一九四三年八月からミラグロス小学校の

二年生として学校に通うようになった。戦争が始まると、日本軍はミラグロスにも来た。日本軍は、ミラグロス小学校の敷地内の校舎の裏に仮設の建物を建てそこに駐屯した。

九月の第三週に入った頃から、日本兵が女生徒を教室の外へ連れ出すようになった。九月の第四週の水曜日の午後授業終了間際に、二人の日本兵が学校に来て、原告レイエスを連れ出そうとした。担任の先生は、「おもちゃがもらえるよ。」と言ったので、原告レイエスは、不安もあったが、その日本兵について教室を出た。原告レイエス達は、日本軍の仮設建物の方に向かった。ところが、原告レイエスは、仮設建物の入口まで来ると、建物の中に他の女生徒がだれもいない様子だったので急に不安になり、中に入るまいと抵抗したが、日本兵二人に肩と腕を抑えられ、仮設建物の中の小さな部屋に連れ込まれ、外から

鍵をかけられた。部屋が暗くなる頃、部屋に三人の日本兵が来て、原告レイエスを床に押し倒し、強姦した。原告レイエスは、起き上がろうと抵抗したが、日本兵は同原告の右の腰を蹴ってきた。日本兵はとても力が強く、これを拒むことはできなかった。

原告レイエスは、翌日も一日狭い部屋に閉じ込められていた。午後八時頃三人の日本兵が部屋の中に入って来た。原告レイエスは、この三人に昨晚と同じように代わる代わる強姦された。日本兵の力は強く、原告レイエスは衰弱していたので、とても抵抗できるような状態ではなかった。三人が終わると、次は二人の日本兵が来て原告レイエスを強姦した。この日は計五人に強姦された。原告レイエスは、何とか逃げようと思ったが、外からは当番兵らしい日本兵が笑いながら話しているのが聞こえ、とても逃げることはできないと思った。こ

の日は身体が痛くて眠ることができなかつた。

部屋に監禁されて三日目の朝も三人の日本兵が部屋に来て、原告レイエスを強姦した。

監禁されて四日目の朝、すなわち九月の第四週の土曜日の朝、一人の日本兵がドアを開けて部屋の中に入ってきた。原告レイエスは、立ち上がろうとしたが、体が衰弱していて壁をつたってようやく立てる状態だった。その日本兵は、原告レイエスを部屋から出して建物の出口まで引っ張って行った。そこでやっと原告レイエスは解放された。

原告レイエスは、既に処女でなくなっており、自分は他人と同じように交際できない、人に会うのは恥ずかしいといつも思い自殺も考えたことがある。しかし両親の悲しみを考えると自殺もできなかつた。原告レイエスは時々日本兵

に受けた被害のことを思い出すことがある。そんな時は、一層家事等仕事に精を出して、忌まわしい思い出を振り払おうとした。また、原告レイエスは頻繁に起こる頭痛に悩まされている。これも日本兵に平手打ちにされてからのことである。

四一

原告

フリアス

原告

フリアス（以下「原告フリアス」という。）は、

一九二六年一〇月五日ルソン島の東南部ビコール地方の南にあるカマリネス・スール州シプコットのアニブ村で生まれた。

一九四二年、原告フリアスが一六歳の時、日本軍がアニブ村にやってきた。両親が日本兵に呼ばれて会議に出ている間の朝の九時か一〇時頃、原告フリアスは二〇歳の叔母と小さなココナツプランテーションで家畜の世話や洗濯をし

ていた。その時、五人の日本兵がゲリラ搜索のため原告フリアスの家に来た。そして、そのうち二人の日本兵が、原告フリアスに対し、「夫はゲリラか」と聞いてきた。二人の日本兵の質問に、原告フリアスは驚いて答えられなかった。そうすると、日本兵は、タバコの火を原告フリアスの頬に押しつけてきた。それで原告フリアスが大声をあげると、別の日本兵が腰にさしていたジャングル・ナイフ（長さ約三〇センチメートル）を抜いて、原告フリアスの顔を刺した。日本兵は原告フリアスの口か喉を狙ったようだったが、同原告が動いたのでナイフは同原告の右鼻孔部に刺さった。また、二度目に刺されたときには、原告フリアスの右目下の頬に刺さった。この傷跡は、今でもはっきりと残っている。それからその日本兵は原告フリアスの後ろ髪をつかみ、水をためていたドラム缶に何度も顔を押しつけた。そしてその日本兵は、原告フリアスを後ろ

手にしばって、庭のランカ（ジャックフルーツ）の木に縛り付けて、二人で代わる代わる同原告を強姦した。

日本兵は、翌週そして翌々週と三回村にやってきたが、三回目の時に村人に対し全員この村から退去するように警告を発した。それで、原告フリラス達の家族は、船でナガ市の近くのカブサオという漁村へ避難した。


一九四四年の後半に原告フリラス達がカブサオからアニブ村に戻ってきて一か月程が経ったある日、日本兵が同原告達の住んでいた学校へやって来た。日本兵は、原告フリラスを捕まえて連れて行こうとした。原告フリラスは抵抗したが、なす術もなく、他のフィリピン女性と一緒に腰を縄で繋かれ、連れて行かれた。原告フリラス達は、午後一時頃に学校を出て夕方五時まで休みなしに歩かされ続けた。最初の夜、原告フリラスや他の女性は、山の中の地面に布を

敷いた上に寝かされ、縄に繋がれたまま、一〇人の日本兵に輪姦された。他の女性も同じように日本兵に輪姦されていた。

次の朝、また山の中を歩き始め、昼頃、日本兵はゲリラのキャンプ地を見つけた。日本兵はそこに駐屯し始めた。ゲリラキャンプ跡には、横五メートル、縦八メートル位の長方形の小屋が一棟あり、連行された原告フリアス達フィリピン人は、この小屋で寝泊まりさせられ、いつも日本兵が監視していた。原告フリアス達女性四名は、いつも約一メートル間隔に腰を縄でつながれたままで、昼間の間は小川で洗濯をさせられ、夜は毎晩のように小屋の中で、キャンプ地に残っている日本兵に強姦されたが、その間も四人はつながれたままだった。原告フリアスを強姦した日本兵は、多いときで一晩七、八名で、総数で一〇〇名位になると思われた。

そのような監禁生活が二か月近く続いた後、空にアメリカの飛行機が舞うようになり、キャンプ地に残っていた日本兵部隊は、直ちに逃げる準備をはじめて出発し、フィリピン人が取り残された。そこで、男性のフィリピン人が原告フリアス達の縄を解き、日本兵が出発してしばらくしてから逃げた。

四一 原告 ミサ

原告  ミサ（以下「原告ミサ」という。）は、一九二九年五月三日、ルソン島中部のブラカン州ノルサガライで生まれた。

一九四四年の一〇月のある日、朝九時頃、原告ミサが家で家族と朝食をとっていたところ、突然銃剣を持った軍服姿の日本兵五人が家の中に物も言わずに押入って来た。姉は日本兵に噛みつくなどして抵抗した。すると日本兵は、姉に平手打ちなどをした後で、姉を家の外で殺してしまった。原告ミサの父は、

同原告と姉を日本兵から引き離そうとして抵抗したが、日本兵から首や肩を銃剣で叩かれ、その後、腹部を何度も銃剣で刺されて死んでしまった。父が殺されるのを見て母は倒れた父親に駆け寄って抱き上げようとしたところ、日本兵は母を引き起こして銃剣で喉を刺し、お腹を切り裂いて殺してしまった。

その後、日本兵は、原告ミサを歩かせ、日本軍の駐屯地に連行した。日本軍の駐屯地は、ノルサガライの郊外のビッグティと呼ばれる所にあり、そこは山の中で岩や洞窟がたくさんある所だった。日本軍は、そのたくさん洞窟と、高床式の家に駐屯していた。原告ミサは、高床式の家の床下に入れられた。原告ミサは、その床下に入れられるとすぐ、同原告を連行して来た日本兵五人のうちの一人から、部屋の隅の方で強姦された。原告ミサは、その日の朝、日本兵が両親と姉を殺害している所を見ているので恐くて抵抗することはできな

つた。その夜は八名に強姦された。それ以来、毎夜のように強姦された。昼間は、毎日五名程の女性が交代で、外で食事の用意や洗濯をさせられ、洗濯の後には小さな泉で水浴びするように命じられた。床下の部屋の周りには、いつも日本兵の見張りがいて逃げることはできなかつたし、洗濯しているときも高い場所から監視されていた。

そのような監禁と強姦が、一九四四年一〇月から一九四五年一月までの三か月間続いた。ところが一九四五年一月のある日、午前一一時頃、食事と洗濯の仕事から床下の部屋に戻ってくると、床上で日本兵がザワザワと荷物を片づけている気配がしていたので、原告ミサは、この隙を見計らって逃げ出した。原告ミサは、日本兵に最初に強姦されてからずっと性器に痛みがあり、また逃げたときには痒みもあった。

四三 原告 マナレス

原告 マナレス（以下「原告マナレス」という。）は、一九三〇年五月一〇日、ルソン島・マニラ、サンミゲル（地区）リオヴィスタで生まれた。

一九四二年日本軍がマニラにやって来た後、ある日、原告マナレスが自宅近くの川岸で沢山の子ども達と遊んでいるとき、日本軍の船が同原告達の近くに乗りつけてきた。そして日本兵が原告マナレスに来るように手招きをした。原告マナレスはその誘いによって船に乗った。船に乗ると鮎があり日本兵がその鮎を指さした。そこで原告マナレスは鮎のある方向に近づいて行った。原告マナレスは当時まだ幼く鮎が欲しくてそちらの方に近づいて行った。その時、いきなり船の船尾が閉まり船は動きだした。船の中にはおよそ五人位の兵隊が乗っていた。また、船室には銃も置いてあった。原告マナレスは、何人かの兵士

に手を押さえつけられ、強姦された。その当時、原告マナレスはまだ初潮も来ておらず、性的経験はもちろん性的知識もなかった。強姦されて性器から沢山の血が出てお腹は大変な痛みが続いた。その日の夜から、翌朝にかけて、何人かの兵士が次々と時間をおいて強姦し続けた。

原告マナレスはその船の中におよそ五、六日間、閉じ込められていた。この間日本兵は、毎日入れ代わり立ち代わり原告マナレスを強姦し続けた。五、六日が経ってその船は、原告マナレスの家の近くまで戻ってきてようやく同原告を降ろしてくれた。

原告マナレスが船から降ろされてから一週間以上か二週間位経った頃、再び前の時と同じ兵士達が乗った同じ船が同原告の家のすぐそばの船着場にやって来た。兵士達は、船着場辺りに居た原告マナレスを見つけてや同原告を指さし

て来るように手招きした。原告マナレスは、一度目の乗船の時に耐えがたい行為をされ大変怖かったので船に乗りたくないという気持ちでいっぱいだった。しかし、その時、家には母や姉妹がおり、原告マナレスが行かないと同原告や家族にどんな危害が加えられるかもしれないという恐怖感は、それ以上に強いものだった。そんな気持ちからしかたなく再び原告マナレスはその船に乗船した。乗船後、前と同じように毎日、原告マナレスは約五名の兵士に入れ代わり立ち代わり強姦された。こんな日々が数日間続き、再び原告マナレスの家の近くの川岸で船から降ろされた。

二度目に船から降ろされてから、およそ一週間以上経った頃、再び、同じ船が家のそばの船着場にやって来た。やって来た兵士達は、簡単に原告マナレスを見つけて再び同原告に船に乗るように手招きをした。原告マナレスは、怖く

て抵抗することができず、船に乗らざるをえなかった。船は原告マナレスを乗せた後、川を走って行った。二日間に閉じ込められ、三日目にようやく原告マナレスの家の近くで船から降ろされた。この間も三人の日本兵から代わる代わる強姦され続けた。

原告マナレスは、一九四五年から夫と一緒に暮らすようになったが、子供ができないまま一九五五年に夫は死亡した。子供ができなかったのは、初潮もない少女時代に強姦されたことにより子宮に異常ができたことが原因である。この夫とはフィリピンでいう正式の結婚、つまり教会で結婚式をあげ、また、役所に結婚届けを出すことはできなかった。というのは当時のフィリピンでは処女でないと正式の結婚はできないという風潮が強かったからだ。また、夫には強姦の事を隠し通した。というのは処女でないまま夫婦関係になると別れ

られてしまうことが、当時よくあったためだった。

四四 原告マルティネス

原告[]マルティネス(以下「原告マルティネス」という。)は、

一九二七年二月一五日、ルソン島東南のビサヤ諸島の中にあるマスバテ島のピーユーヴィコルプスで生まれた。

一九四二年一一月頃、日本軍が原告マルティネス達の町にやってきた。原告マルティネスが連行されたのは、一九四四年、既にアメリカ軍の反撃が始まって、日本軍が追いつめられようとしていた頃だった。ある日、日本兵は原告マルティネス達の家にもやってきた。日本兵は原告マルティネスと父を銃剣で脅して連れて行こうとした。そして、原告マルティネス達は、一時間位でピーユーヴィコルプスの中心のタバコ集荷場に置かれた駐屯地に着いた。原告マルテ


イネス達は、男女に分けられて、駐屯地にされていたタバコ集荷場の建物に入られた。父と原告マルティネスも別れ別れにされた。建物はもともと一つの大きな部屋になっていたが、日本兵はちょうど男と女を入れた場所を仕切るように、部屋の真ん中あたりに木製の簡単な仕切を設け、原告マルティネス達を閉じ込めたのだった。連行された翌日の夜、上官の日本兵がやってきて、原告マルティネスを強姦した。

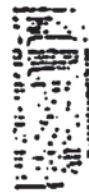
原告マルティネスは、その部屋には約一か月監禁された。原告マルティネスを強姦したのはその上官の日本兵だけで、毎日という訳ではなく、来ない日もあった。食事は、日本兵の命令で原告マルティネス達が作った。その他に洗濯もするように言われ、原告マルティネスはその上官の日本兵の軍服を洗った。トイレや洗濯、炊事等、部屋を出るときには、必ず見張りがついていた。

ある時、アメリカ軍による爆撃が始まり、駐屯地の近くの墓地にも爆弾が落ちた。日本兵達は慌てて逃げ出した。原告マルティネス達の部屋にはその時鍵がかかっておらず、同原告達も逃げ出した。

現在でも、原告マルティネスは、強姦した上官の日本兵を憎んでおり、見つけたら殺してやりたいくらいの気持ちをもっている。

四五 原告 カバラ

原告  カバラ（以下「原告カバラ」という。）は、セブ島のナガ町 バランガイ・カントロアンで生まれ、現在まで同じ村で生活している。原告カバラの両親は農業で生計をたてていたが、原告カバラの幼い時にいずれも亡くなった。いつ亡くなったのか、その時原告カバラが何歳だったのかはわからない。



一九四二年に日本軍がセブ島に上陸した。日本軍は原告カバラの家から数キロメートル離れたマグドクに駐屯した。日本兵が家に来た時期は一九四三年の一月か二月頃だった。原告カバラが、叔父の家に行くと、日本兵が入ってきた。原告カバラは後ろ手に縛られ、向かい側の山にあり三、四キロメートル離れたマグドクの駐屯地に連れて行かれた。この駐屯地の中にニツパと竹とでできたニツパハウスがあり、原告カバラ達三人はこの建物に入れられた。そこで原告カバラ達はこの連行してきた三人のうちの二人の日本兵によって強姦された。原告カバラはそれまで性的な体験が全くなく、恐ろしくまた痛みのために気を失いそうだった。その夜さらに三人の日本兵が来て原告カバラを強姦した。翌日は朝一人、晩に一人、翌々日は一人、と日本兵が来て原告カバラを強姦した。原告カバラが抵抗しようとする、日本兵は銃剣を示して殺す素振りをしたの

で、抵抗はほとんどできなかつた。建物には鍵がかかつていながつたが、建物周辺には必ず監視している日本兵がいて逃げ出すことはできなかつた。

連行されて四日目の朝、原告カバラは、日本兵によつて建物の外に連れ出された際、隙をみて逃げ出した。原告カバラを捕まえようと三人の日本兵が追いかけてきたが、途中であきらめて追いかけるのをやめた。

原告カバラは日本兵に強姦されたことを大変な屈辱と思つており、このために結婚するまいと決意し、實際結婚しなかつた。

四六 原告 ■■■■■ フェルナンデス

原告 ■■■■■ フェルナンデス（以下「原告フェルナンデス」という。）

は、一九二九年二月二六日、レイテ島オルモック市（現在のアルプエラ町）カントゥーポ・ストリートで生まれた。

一九四三年になると日本本国からフィリピンの日本軍への物資の補給が途絶えたらしいという噂が耳に入るようになり、アルプエラの町に駐留していた日本軍による略奪が頻繁に繰り返されるようになった。原告フェルナンデス連一家は、日本軍の襲撃行為が度重なるにつれ、次第に、更に山奥へと移住していた。

一九四三年一月頃、山の生活が一年位続き、原告フェルナンデスが一四歳になったときのことだった。原告フェルナンデスは早朝、泉へ入浴に行き、入浴を終えて衣類を着終えた頃、日本兵七、八人の小隊がやってきた。それから日本兵の「タナカ」という者が、原告フェルナンデスをタリサヤン村にあった山の頂上部の駐屯地まで連れて行った。「タナカ」は兵舎の中の自分の部屋へ原告フェルナンデスを連れ込んだ。「タナカ」は部屋へ入ると原告フェルナン

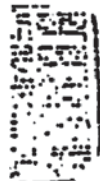
デスを強姦した。原告フェルナンデスは当時まだ性体験がなく、この時の強姦で大量に出血した。

その日から原告フェルナンデスは、この「タナカ」に拘束され、その部屋に監禁されることになった。拘束されていた約一〇日間、
「タナカ」は朝昼かまわずやってきて原告フェルナンデスを強姦した。「タナカ」の部屋の前には日本兵が一人いつも警備しており、逃亡する機会は全くない状態だった。

拘束されて一〇日目のことだった。原告フェルナンデス達は川まで水浴びに行つた際、監視の兵士の目を盗んで逃げた。原告フェルナンデスはこの時の逃亡で左足の指にケガをした。

この体験で原告フェルナンデスは男性や性に対して深い嫌悪感を持った。原告フェルナンデスは、日本軍による被害で神経質になり、レイプに関するテレ

どなどを見ると、当時を思いだし、心臓が高なり、興奮するなど現在も辛いこ
とが続いている。





11-11-1964

11-11-1964